日田地区遺跡群発掘調査報告９
日田市埋蔵文化財調査報告書第78集

長者原遺跡Ⅱ

2007年

日田市教育委員会

遺跡遠景（南東から）

調査区全景（真上から）

西側調査区全景（真上から）

１～３号溝土層堆積状況

４号墓人骨出土状況

５号墓人骨出土状況

序　文

この報告書は、当教育委員会が住宅建設に先立ち、平成 12 年度に国庫・県費の補助を受けて実施した長者原遺跡４次調査の内容をまとめたものです。

長者原遺跡は旧石器時代から近代に至る市内有数の複合遺跡で、遺跡内には国指定史跡の装飾古墳である穴観音古墳が存在します。また、「原（はる）の長者」で知られる日下部春里の伝説の残る地でもあります。

調査では弥生時代の環濠や古墳時代の墓地などが発見され、当時の集落構造や墓制を考える上で、貴重な成果を得ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、指導をいただきました先生方や発掘作業に従事いただきました作業員の皆様方、地元をはじめとして調査にご協力いただきました方々に対して、心から厚くお礼申し上げます。

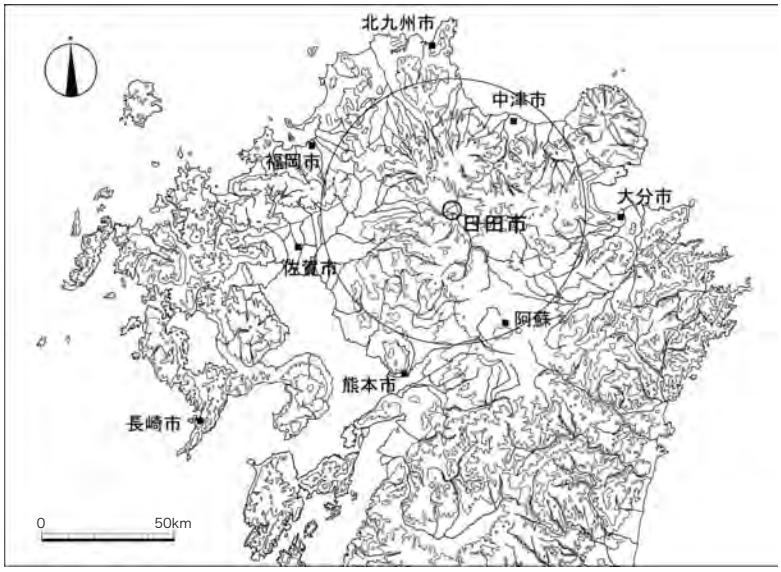
平成 19 年３月

日田市教育委員会

教育長　諫山　康雄

例　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成１２年度に実施した長者原遺跡４次の発掘調査報告書である。
2．調査は個人住宅建設工事に伴い、国庫及び県費の補助を受けて、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3．調査現場での実測・写真撮影は若杉・渡邉が行った他、実測は雅企画有限会社に委託、写真撮影は文化財写真家・長谷川正美氏に委託をした。
4．本書に掲載した遺物実測は若杉が行った他、石器の一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、製図は若杉の他、雅企画有限会社の委託による成果品を使用した。
5．本書に掲載した空中写真は有限会社スカイサーベイ九州に委託し、その成果品を使用した。
6．本書に掲載した遺物写真は長谷川正美氏（雅企画有限会社）に委託し、その成果品を使用した。
7．本書に使用した図面中の方位は、全体図は真北、個別図は磁北で表示している。
8．写真図版に付している番号は挿図番号に対応する。
9．出土遺物および図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 本書の執筆は人骨の分析を九州大学・田中良之教授に依頼し、縄文土器は今田、その他は若杉 が行い、編集は若杉が担当した。
11. 最後に本書を作成するにあたり、以下の方々より有益なご指導をいただいた。記して感謝いたします。
下村智（別府大学）　杉井健（熊本大学）　田中裕介（大分県教育庁埋蔵文化財センター）



日田市の位置図

本文目次

Ⅰ　調査に至る経過と組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　調査の記録 …… 6
（1）　調査の概要 …… 6
（2）　溝 …… 7
（3）　墓 …… 12
（4）　その他の遺物 …… 26
Ⅳ　長者原遺跡の出土人骨 …… 30
Ⅴ　まとめ …… 42

挿図目次

第1図　調査区周辺図（1/2500） …… 3
第2図　周辺遺跡分布図（1/15000） …… 4
第3図　遺構配置図（1/250） …… 5
第4図　東側調査区溝配置図（1/200） …… 6
第5図　1トレンチ土層図（1/40） …… 5
第6図　1号溝出土遺物実測図（1/2・1/4） …… 8
第7図　3・4a・4b トレンチ実測図（1/40） …… 9～10
第8図　2号溝出土遺物実測図（1/4） …… 11
第9図　3号溝出土遺物実測図（1/4） …… 11
第10図　1号墓実測図（1/30） …… 12
第11図　2号墓実測図（1/30） …… 13
第12図　2号墓出土遺物実測図（1/2） …… 14
第13図　3号墓実測図（1/30） …… 15
第14図　3号墓出土遺物実測図（1/2） …… 15
第15図　4号墓人骨・遺物出土状況実測図（1/20） …… 16
第16図　4号墓実測図（1/30） …… 17～18
第17図　4号墓出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1） …… 19
第18図　5号墓実測図（1/30） …… 20
第19図　5号墓人骨出土状況実測図（1/20） …… 20
第20図　6号墓実測図（1/30） …… 21～22
第21図　6号墓出土遺物実測図（1/2） …… 24
第22図　7号墓実測図（1/30） …… 24
第23図　7号墓出土遺物実測図（1/3・1/2） …… 25
第24図　その他の出土遺物実測図（1）（1/3） …… 27
第25図　その他の出土遺物実測図（2）（2/3） …… 28
第26図　その他の出土遺物実測図（3）（1/3・2/3） …… 29

写真図版目次

写真図版１　上　溝検出状況
　　下　１トレンチ土層堆積状況
写真図版２　上　１トレンチ土層堆積状況
　　下　３トレンチ土層堆積状況
写真図版３　上　３トレンチ土層堆積状況
　　下　４a トレンチ土層堆積状況
写真図版４　上　２トレンチ（２号溝）遺物出土状況
　　下　３トレンチ（２号溝）遺物出土状況
写真図版５　上　１号墓検出状況
　　下　２号墓検出状況
写真図版６　上　２号墓発掘状況
　　下　２号墓墓坑完掘状況
写真図版７　上　２号墓遺物出土状況
　　下　３号墓検出状況
写真図版８　上　４号墓蓋石検出状況、完掘状況
　　下　４号墓完掘状況
写真図版９　上　４号墓完掘状況
　　下　４号墓長側壁石積状況
写真図版 10　上　４号墓小口壁石積状況、人骨出土状況
　　下　４号墓遺物出土状況
写真図版 11　上　５号墓蓋石検出状況、完掘状況
　　下　５号墓完掘状況
写真図版 12　上　５号墓完掘状況
　　下　５号墓人骨出土状況
写真図版 13　上　６号墓検出状況、蓋石除去後状況
　　下　６号墓完掘状況
写真図版 14　上　６号墓完掘状況
　　下　７号墓検出状況、完掘状況
写真図版 15　　７号墓遺物出土状況
写真図版 16　　遺物写真（溝）
写真図版 17　　遺物写真（２号墓）
写真図版 18　　遺物写真（３，４，６，７号墓）
写真図版 19　　遺物写真（その他の遺物）
写真図版 20　　遺物写真（その他の遺物）

表目次

第１表　出土土器観察表（1）…… 45
第２表　出土土器観察表（2）…… 45
第３表　出土石器観察表　…… 46
第４表　出土玉類観察表　…… 46
第５表　出土鉄器観察表　…… 47

本文挿入写真目次

写真１　調査作業風景　…… 1
写真２　現地説明会風景　…… 2
写真３　人骨取上げ作業風景　…… 25
写真４　調査区埋め戻し作業風景　…… 29

Ⅰ　調査に至る経過と組織

（1）調査に至る経過

平成 11 年 9 月 13 日付けで個人の方より市教育委員会へ、日田市大字小山字沖原 195 番地２他４筆での住宅新築工事に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である長者原遺跡に該当し、これまでの３次に亘る調査で古墳時代の住居や縄文時代の包含層が確認されており、また予定地の西約 50 mには穴観音古墳が存在し、遺跡の存在する可能性が高いことから、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。

その後開発者と協議を行い、平成 12 年 3 月 23 日から 31 日の間に試掘調査を行った。その結果、竪穴式石室とみられる石積み・石棺墓や遺物が確認されたことから、発掘調査が必要であると判断した。

試掘調査結果に基づき、具体的な調査範囲や調査方法についての協議を開発者側と行った。まず、道路位置指定の部分については全面調査を行うこととした。次に住宅部分については工法的には遺構面を損なう可能性はなかったが、試掘で確認された石棺墓、ならびにその他の遺構については、トレンチ掘りや半掘を行い、時期・規模等の確認をするための調査を行い、調査終了後は埋め戻すことになった。また、この事業は個人住宅建設であることから、調査経費については全て国庫・県費補助事業である日田地区遺跡群発掘調査事業で対応した。

（2）調査の経過

本遺跡の調査経過について、調査日誌に基づき略述する。

５月 18 日　表土剥ぎを開始し、石棺３基を検出する。
５月 24 日　遺構検出を開始する。
６月　１日　遺構の掘り下げを開始する。
６月 15 日　遺構実測を開始する。
７月　６日　４・５号墓を開棺し、人骨を確認する。
７月 10 日　福岡大学・小田富士雄教授、別府大学・下村智助教授に指導を受ける。
７月 13 日　４・５号墓の人骨取り上げを開始する。
　　九州大学・田中良之教授、大分県教育庁文化課・渋谷忠章参事に指導を受ける。
７月 19 日　報道機関に調査成果を公表する。
７月 21 日　空中写真撮影を行う。
７月 22 日　現地説明会を開催し、市内外から 122 名が参加する。
７月 26 日　別府大学・本田光子助教授に指導を受ける。
７月 27 日　溝のトレンチ掘り下げがほぼ終了し、深さを確認する。
８月　４日　別府大学・賀川光夫名誉教授に指導を受ける。
８月　５日　福岡大学・小田富士雄教授に指導を受ける。
８月　７日　真砂土による埋め戻しを開始する。
８月 10 日　機材を撤収し、調査終了

調査終了後の８月 10 日には日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、８月 24 日に埋蔵物の文化財認定を受けた。なお、整理作業は平成 12 年９月１日から 29 日の間、実施した。

写真１　調査作業風景

（3）調査組織

なお、調査関係者は以下のとおりである（職名は当時のままとしている）。

平成 12（2000）年度／発掘調査・整理作業

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　渋谷忠章（大分県教育庁文化課参事）、田中良之（九州大学教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、本田光子（別府大学教授）調 査 統 括　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）

調 査 事 務　石井英信（日田市教育委員会文化課課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同主査）、江田香織（同臨時職員）

調 査 担 当　若杉竜太（日田市教育委員会文化課主事）、渡邉隆行（同主事）

調　査　員　行時志郎（日田市教育委員会文化課主任、試掘担当）、吉田博嗣（同主任）

発掘作業員　岡崎建治　梶原秋生　梶原サツ子　熊谷照子　中村洋子　野村クミ子　野村トシ子　野村義子　野村多美子　原田保枝　舟橋京子　森山キクヨ　森口信哉　柳瀬明子　吉田玉枝　吉田ヤフミ　吉田ヨシエ

整理作業員　梶原ヒトエ　平川優子　吉田千津子

来　訪　者　賀川光夫（別府大学名誉教授）、下村智（別府大学助教授）

平成 18（2006）年度／報告書作成・印刷

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　後藤清（日田市教育委員会文化財保護課長）

調 査 事 務　高倉隆人（日田市教育委員会文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、田中正勝（同専門員）伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）

報告書担当　若杉竜太（日田市教育委員会文化財保護課主任）

調　査　員　今田秀樹（日田市教育委員会文化財保護課主任）、行時桂子（同主任）、渡邉隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事）

写真２　現地説明会風景

Ⅱ　遺跡の立地と環境

長者原遺跡は、遺跡名が示すように通称「原（はる）」と呼ばれる、日田盆地内で多く見られる発達した台地の１つである長者原台地に所在する。

長者原台地は三隈川左岸にあり、南側の津江山系から連なる丘陵の北端に位置する。三隈川左岸の「原」はこの他に上野原、陣ヶ原などが長者原の東側に小谷を挟んで存在する。これらの台地より低標高部分には、扇状地や河岸段丘がみられ、さらに川との間に狭い沖積地が広がる。このような地形的な特徴は、遺跡の立地状況にも反映されている。三隈川右岸には、台地周辺に広い沖積地が広がり、台地上・低地に大規模な遺跡が存在するのに対して、左岸では、沖積地上には大規模な遺跡は見られず、台地上に集中している。

長者原遺跡は「原」台地の東側一帯に広がる旧石器時代から近世に至る遺跡である。これまでに６次にわたって調査されており、以下概要を述べる。

１次調査では旧石器時代のナイフ形石器や弥生時代後期の竪穴住居跡[(1)]、２次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡[(2)]、３次調査では縄文時代の土坑や柱穴[(3)]、５次調査では中世～近世の炭窯[(4)]、６次調査では古墳時代の溝や土坑が確認されている[(5)]。また、長者原遺跡の西側に広がる長者原田迎遺跡では、弥生･古墳時代～古代･中世の竪穴住居跡や掘立柱建物などが発見されている[(6)]。

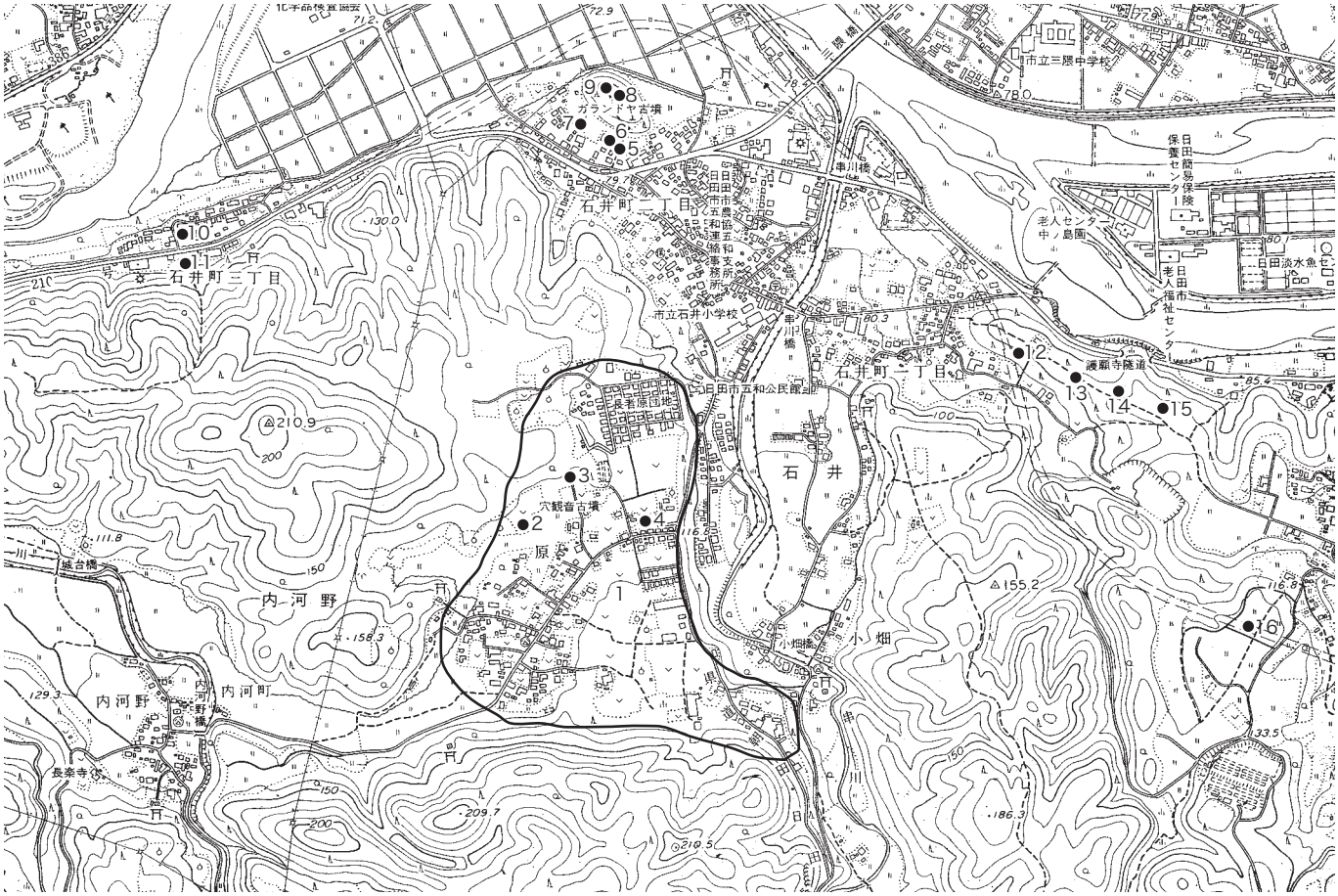
また、今回の４次調査区の西約 100 mには、装飾を有する複室構造の横穴式石室を主体とする穴観音古墳が存在する[(7)]。古墳は径約 25 mの円墳で１条の周溝が巡る。周溝内出土の遺物から６世紀末～７世紀初頭の築造とみられる。穴観音古墳の南東側には古墳があったと伝えられているが、現在は消滅している[(8)]。

台地北側の沖積地上には２基の装飾古墳を含む３基の円墳からなるガランドヤ古墳群がある[(9)]。１号墳は複室構造の横穴式石室を、２号墳は単室もしくは小規模な前室をもつ横穴式石室を主体とする。出土遺物から１号墳は６世紀後半、２号墳は６世紀中頃の築造と考えられる。このガランドヤ古墳群北側の独立丘陵上には、横穴式石室を主体とする隈山古墳[(10)]や中世後半の墓地が確認されている隈山遺跡[(11)]がある。また、同じく西側の台地裾・沖積地上には、横穴式石室を主体とする円墳の津辻古墳群が存在する[(12)]。

また、谷を挟んで東側の台地上には縄文時代～中・近世に遺構や遺物が確認された寺内遺跡[(13)]、前方後円墳を含む３基の古墳からなる護願寺古墳群[(14)]がある。さらに弥生時代中期初頭の小児用甕棺墓が調査された上野第２遺跡が所在する[(13)]。

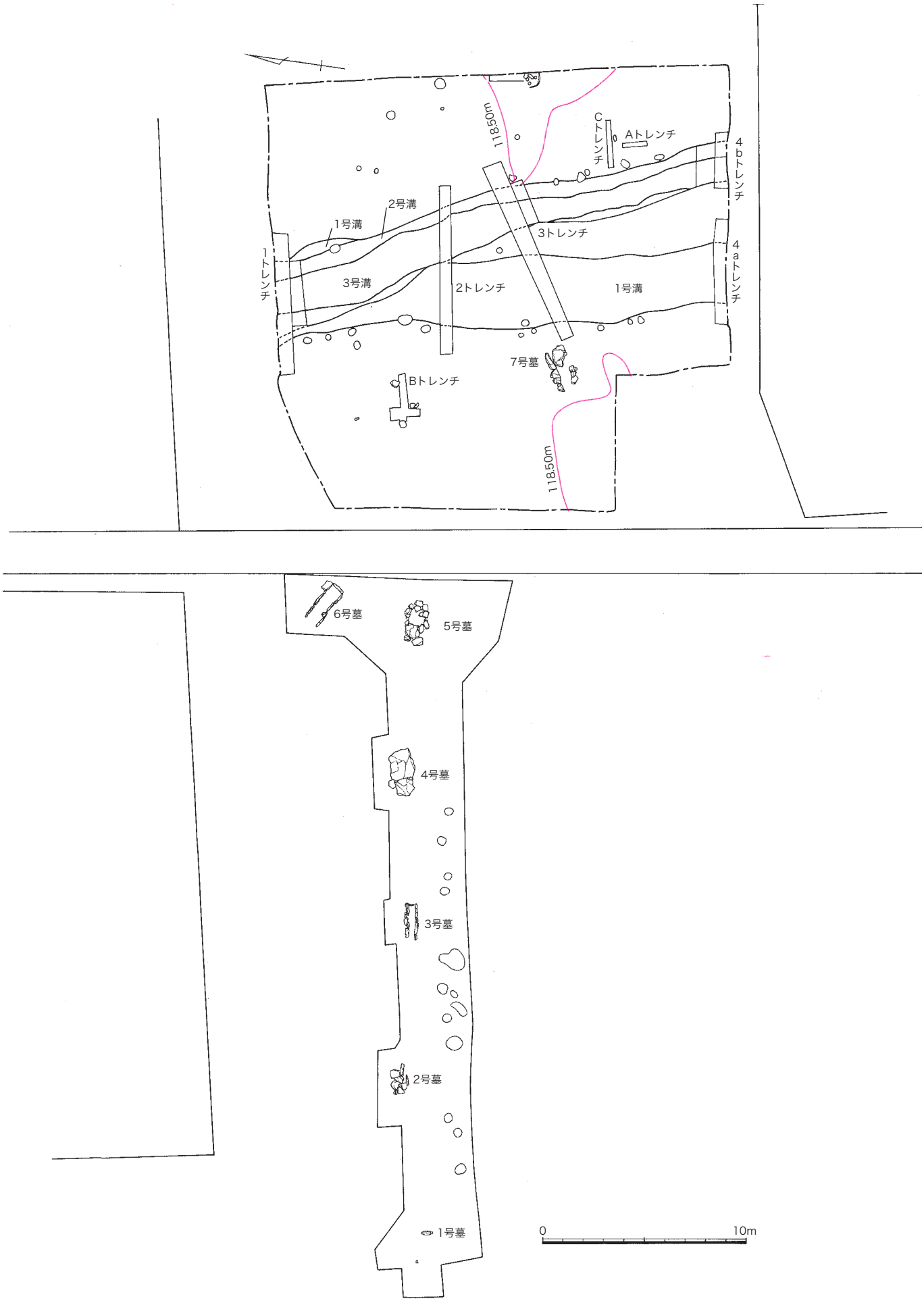
第１図　調査区周辺図（1/2500）

註（1）土居和幸「長者原遺跡」同編『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』 日田市教育委員会　1986
（2）土居和幸「長者原遺跡」同編『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』 日田市教育委員会　1987
（3）土居和幸「長者原遺跡」同編『平成９年度（1997 年）日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会　1999
（4）日田市教育委員会が平成 17 年度に調査実施
（5）渡邉隆行編『長者原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 73 集　日田市教育委員会　2006
（6）行時志郎編『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第５集　日田市教育委員会　1992
（7）若杉竜太編『穴観音古墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第 41 集　日田市教育委員会　2003
土居和幸編『穴観音古墳Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 55 集　日田市教育委員会　2004
（8）倉園古墳と呼ばれ、主体部は横穴式石室と推定されている。
（9）小柳和宏編『ガランドヤ古墳群』日田市教育委員会　1986
（10）渡邉隆行「隈山古墳」今田秀樹編『平成 17 年度（2005 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2007
（11）土居和幸「隈山遺跡」若杉竜太編『平成 10 年度（1998 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2000
若杉竜太「隈山遺跡」渡邉隆行編『平成 11 年度（1999 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001
（12）真野和夫「古墳時代」賀川光夫編『大分の歴史（１）ふるさと誕生』 大分合同新聞社　1976
（13）高橋徹他編『日田市高瀬遺跡群の調査４』一般国道 210 号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
大分県教育委員会　2002
行時桂子「上野第２遺跡」若杉竜太編『平成 15 年度（2003 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2004
（14）後藤宗俊「第３章古墳時代」『日田市史』日田市　1991



１長者原遺跡　２長者原田迎遺跡　３穴観音古墳　４倉園古墳　５ガランドヤ３号墳　６ガランドヤ１号墳
７ガランドヤ２号墳　８隈山古墳　９隈山遺跡　10 津辻１号墳　11 津辻２号墳　12 寺内遺跡
13　護願寺１号墳　14 護願寺２号墳　15 護願寺３号墳　16 上野第２遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（1/15000）



第３図　遺構配置図（1/250）

Ⅲ　調査の内容

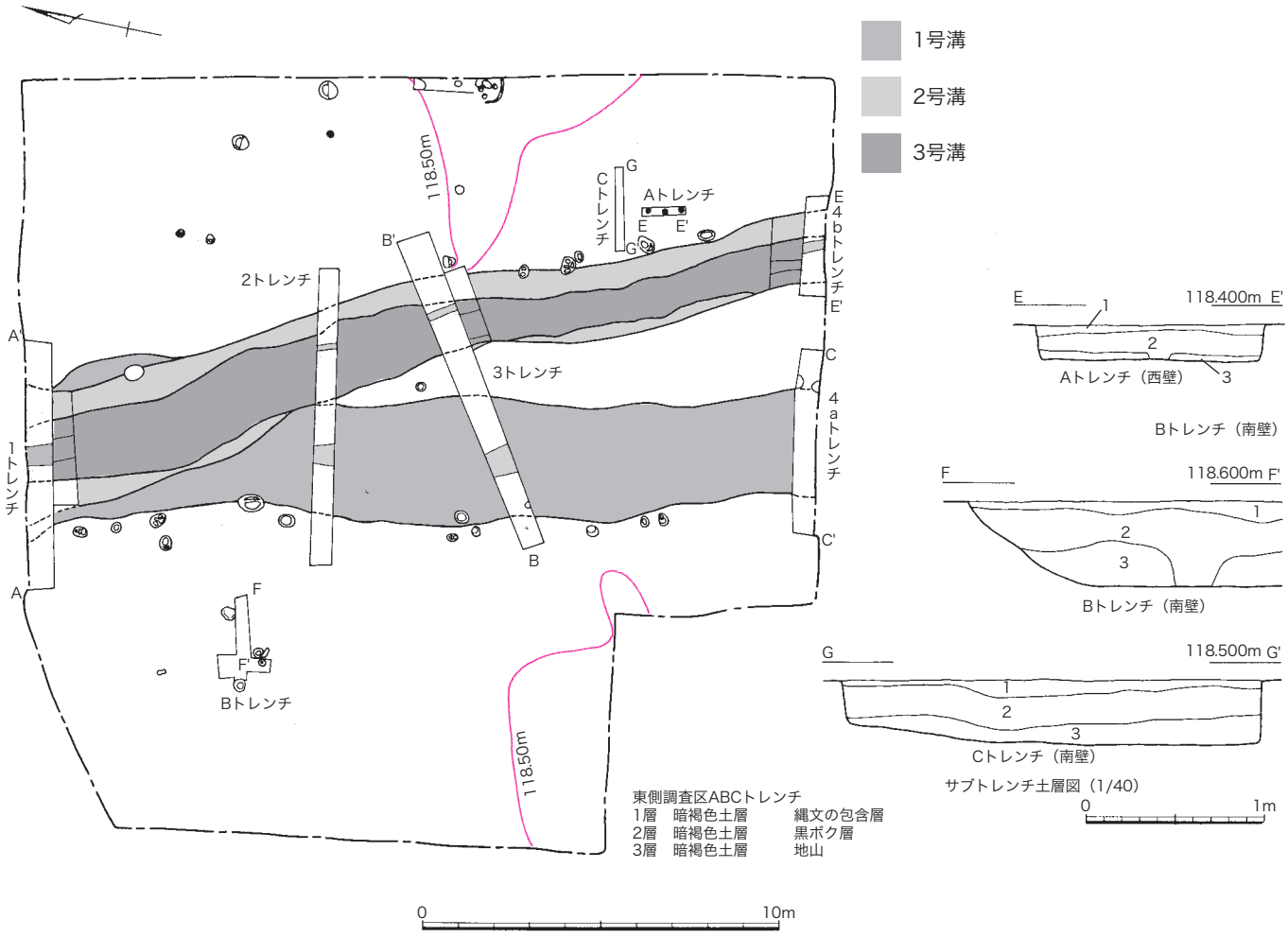
（1）調査の概要（第３・４図）

調査区は長者原台地東側の標高約 120 mに位置し、東に約 100 mで急傾斜の崖面が形成される位置にあり、調査面積は 569 ㎡である。調査区は里道を挟んで、西側に道路部分、東側に宅地部分で分断されており、以下本文中では便宜的に西側調査区、東側調査区として、説明を行う。

遺構検出面は黄褐色ローム層で、その上層は畑地として利用されていたこともあり、現地表面まで耕作土が堆積する。また、調査区全体にわたり、標高は約 118.5 mで傾斜はほとんど見られない。さらに西側調査区や東側調査区の北西側では、ゴボウなどの根茎類を耕作した際のトレンチャーにより大きく撹乱を受けていた。調査の結果、弥生時代の溝が２条、古墳時代の石棺墓･石棺系竪穴式石室が７基、中世以降の溝が１条確認された。このうち、弥生時代と中世以降の溝はそれぞれが切りあって存在している。

また、遺構掘り下げの際には縄文土器や剥片類が多く出土したことから、一部にトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、早期の包含層や集石遺構が検出された。

調査の方法については、Ⅰでも述べたが、工法上遺構面が損なわれることがなかったため、大部分の遺構については、トレンチでの確認や検出のみに留め、完掘は行わなかった。



第４図　東側調査区溝配置図（1/200）

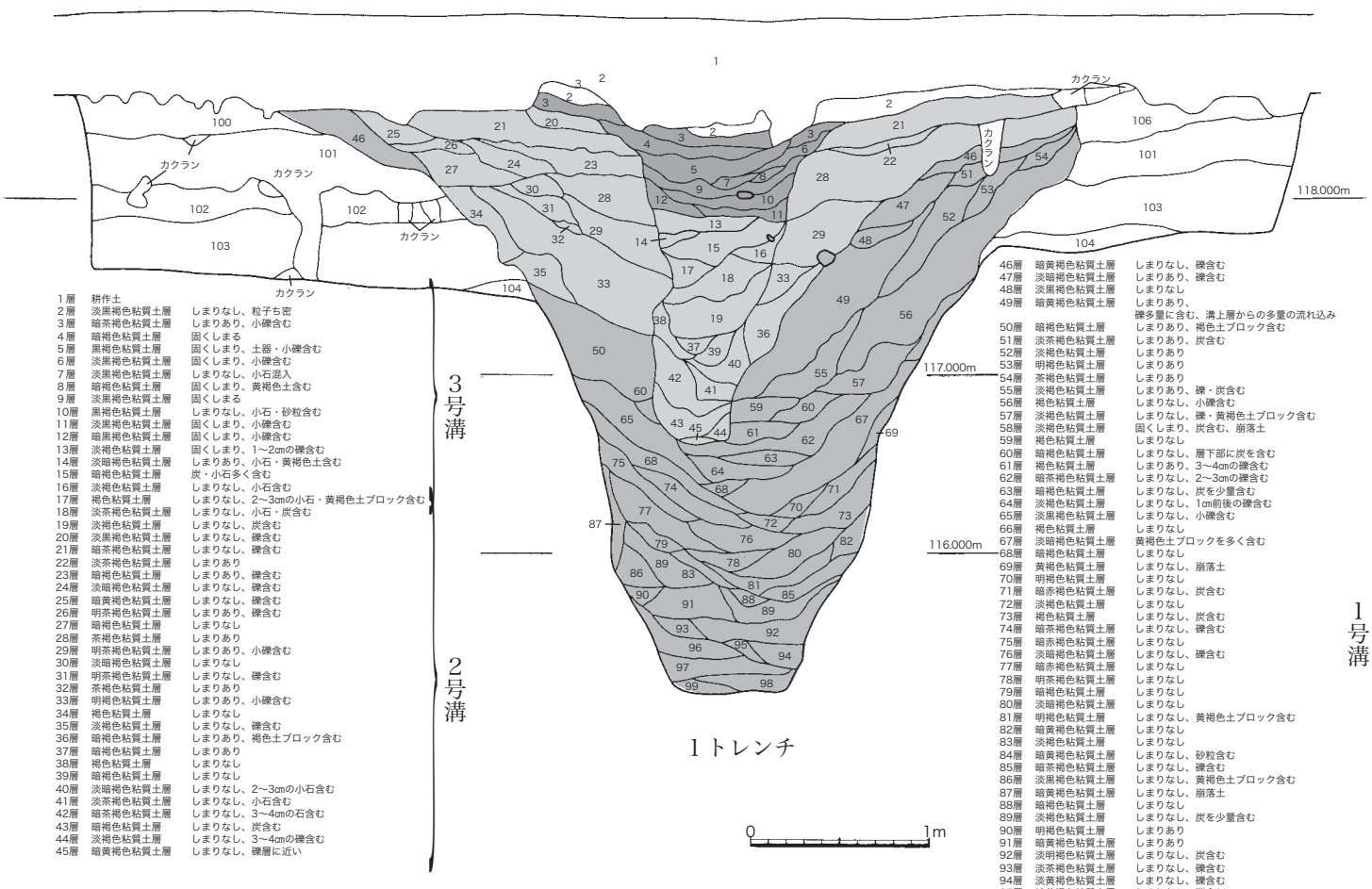
（2）溝

調査区東側の中央付近で３条の溝が確認された。これらの溝は南北に伸び、調査区外へ伸びる。北側では３条の溝が切り合い、南側では２、３号溝が切り合う。調査では、調査区の北側・南側と中央に２箇所の計４箇所にトレンチを設定して、土層観察、及び規模等の確認を行い、このうち３本のトレンチについて、実測を行った。

１号溝（第５～７図　図版１～４）

調査区内をほぼ南北方向に伸びる溝状遺構である。調査区北側で２・３号溝に切られる。溝の幅は検出面で幅約 6.0 ～ 6.4 m、底面で約 0.5 ～ 0.9 mで、底面のレベルは確認を行った１～３トレンチで 115.20 ～ 115.25 mとほぼ平坦であった。また、検出面からの深さは 3.2 ～ 3.3 mである。溝の断面形はおおむね「V」字状を呈し、約 20° の傾斜を持つ。１・３トレンチでは、底面から 0.7 ～ 0.8 m上で壁がやや外側に膨らむように地山が掘り込まれている状況が確認された。また底面はほぼ平坦になっている。溝の方位は凡そＮ－ 15° －Wを向く。

また、３トレンチで確認された 52 ～ 60 層の堆積状況から、溝の埋没後に一旦掘り直しが行われたと考えられる。ただ、掘り直し時の底面レベルや埋土の状況から、同時期の掘り直しである可能性は低い。一方、１トレンチの土層からは明確に掘り直しの痕跡は確認できなかったが、63 層より上層に多量の礫が混入しており、それより下層とは埋土の状況が異なることから、このレベルでの掘り直しが行われた可能性がある。また、掘り直



1層　耕作土
2層　淡黒褐色粘質土層　しまりなし、粒子ち密
3層　暗茶褐色粘質土層　しまりあり、小礫含む
4層　暗褐色粘質土層　固くしまる
5層　黒褐色粘質土層　固くしまり、土器・小礫含む
6層　淡黒褐色粘質土層　固くしまり、小礫含む
7層　淡黒褐色粘質土層　しまりなし、小石混入
8層　暗褐色粘質土層　固くしまり、黄褐色土含む
9層　淡黒褐色粘質土層　固くしまる
10層　黒褐色粘質土層　しまりなし、小石・砂粒含む
11層　淡黒褐色粘質土層　固くしまり、小礫含む
12層　暗黒褐色粘質土層　固くしまり、小礫含む
13層　淡褐色粘質土層　固くしまり、1～2cmの礫含む
14層　淡暗褐色粘質土層　しまりあり、小石・黄褐色土含む
15層　暗褐色粘質土層　炭・小石多く含む
16層　淡褐色粘質土層　しまりなし、小石含む
17層　褐色粘質土層　しまりなし、2～3cmの小石・黄褐色土ブロック含む
18層　淡茶褐色粘質土層　しまりなし、小石・炭含む
19層　淡褐色粘質土層　しまりなし、炭含む
20層　淡黒褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
21層　暗茶褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
22層　淡茶褐色粘質土層　しまりあり
23層　暗褐色粘質土層　しまりあり、礫含む
24層　淡暗褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
25層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
26層　明茶褐色粘質土層　しまりあり、礫含む
27層　暗褐色粘質土層　しまりなし
28層　茶褐色粘質土層　しまりあり
29層　明茶褐色粘質土層　しまりあり、小礫含む
30層　淡暗褐色粘質土層　しまりなし
31層　明茶褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
32層　茶褐色粘質土層　しまりあり
33層　明褐色粘質土層　しまりあり、小礫含む
34層　褐色粘質土層　しまりなし
35層　淡褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
36層　暗褐色粘質土層　しまりあり、褐色土ブロック含む
37層　暗褐色粘質土層　しまりあり
38層　褐色粘質土層　しまりなし
39層　暗褐色粘質土層　しまりなし
40層　淡暗褐色粘質土層　しまりなし、2～3cmの小石含む
41層　淡茶褐色粘質土層　しまりなし、小石含む
42層　暗茶褐色粘質土層　しまりなし、3～4cmの石含む
43層　暗褐色粘質土層　しまりなし、炭含む
44層　淡褐色粘質土層　しまりなし、3～4cmの礫含む
45層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし、礫層に近い
46層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
47層　淡暗褐色粘質土層　しまりあり、礫含む
48層　淡黒褐色粘質土層　しまりなし
49層　暗黄褐色粘質土層　しまりあり、礫多量に含む、溝上層からの多量の流れ込み
50層　暗褐色粘質土層　しまりあり、褐色土ブロック含む
51層　淡茶褐色粘質土層　しまりあり、炭含む
52層　淡褐色粘質土層　しまりあり
53層　明褐色粘質土層　しまりあり
54層　茶褐色粘質土層　しまりあり
55層　淡褐色粘質土層　しまりあり、礫・炭含む
56層　褐色粘質土層　しまりなし、小礫含む
57層　淡褐色粘質土層　しまりなし、礫・黄褐色土ブロック含む
58層　淡褐色粘質土層　固くしまり、炭含む、崩落土
59層　褐色粘質土層　しまりなし
60層　暗褐色粘質土層　しまりなし、層下部に炭を含む
61層　褐色粘質土層　しまりあり、3～4cmの礫含む
62層　暗茶褐色粘質土層　しまりなし、2～3cmの礫含む
63層　暗褐色粘質土層　しまりなし、炭を少量含む
64層　淡褐色粘質土層　しまりなし、1cm前後の礫含む
65層　淡黒褐色粘質土層　しまりなし、小礫含む
66層　褐色粘質土層　しまりなし
67層　淡暗褐色粘質土層　黄褐色土ブロックを多く含む
68層　暗褐色粘質土層　しまりなし
69層　黄褐色粘質土層　しまりなし、崩落土
70層　明褐色粘質土層　しまりなし
71層　暗赤褐色粘質土層　しまりなし、炭含む
72層　淡褐色粘質土層　しまりなし
73層　褐色粘質土層　しまりなし、炭含む
74層　暗茶褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
75層　暗赤褐色粘質土層　しまりなし
76層　淡暗褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
77層　暗赤褐色粘質土層　しまりなし
78層　明茶褐色粘質土層　しまりなし
79層　暗褐色粘質土層　しまりなし
80層　淡暗褐色粘質土層　しまりなし
81層　明褐色粘質土層　しまりなし、黄褐色土ブロック含む
82層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし
83層　淡褐色粘質土層　しまりなし
84層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし、砂粒含む
85層　暗茶褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
86層　淡黒褐色粘質土層　しまりなし、黄褐色土ブロック含む
87層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし、崩落土
88層　暗褐色粘質土層　しまりなし
89層　淡褐色粘質土層　しまりなし、炭を少量含む
90層　明褐色粘質土層　しまりあり
91層　暗黄褐色粘質土層　しまりあり
92層　淡明褐色粘質土層　しまりなし、炭含む
93層　淡茶褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
94層　淡黄褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
95層　暗黄褐色粘質土層　しまりなし、礫含む
96層　褐色粘質土層　しまりなし
97層　淡黒褐色礫層　しまりなし
98層　灰褐色砂層　礫多い
99層　淡茶褐色礫層
100層　暗褐色粘質土層　しまりなし
101層　淡黒褐色粘質土層　黒ボク
102層　暗褐色粘質土層　固くしまる、漸移層
103層　淡褐色粘質土層　固くしまり、炭含む
104層　黄褐色粘質土層　ローム層

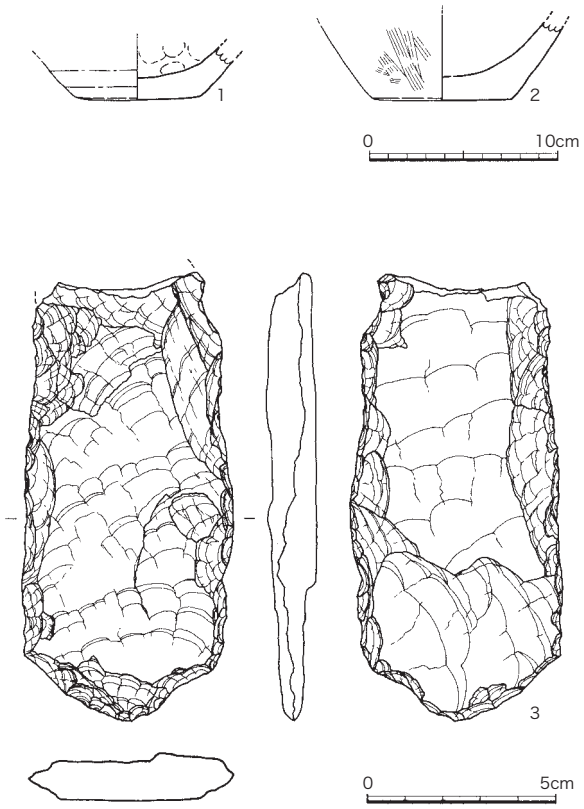
第５図　１トレンチ土層図（1/40）

し後の埋没状況については、49 層に大量の礫が混入しており、さらにこの層を切って２号溝が掘りこまれていることを考えると、短期間で埋まったことが想定される。

また、３トレンチの２～ 34 層については、大量の石材が入っていることや版築状の薄い土層が見られることから、石棺の堀り方の可能性がある。

出土遺物（第６図　図版 16）

１・２は弥生土器甕の底部である。１は平底で、外面にナデ、内面に指押さえが施される。２は平底で外面にハケ・ナデ、内面にナデが施される。３は打製石斧である。刃部と両側縁部には丁寧な加工が施される。



第６図　１号溝出土遺物実測図（1/2・1/4）

２号溝（第５～７図　図版１～４）

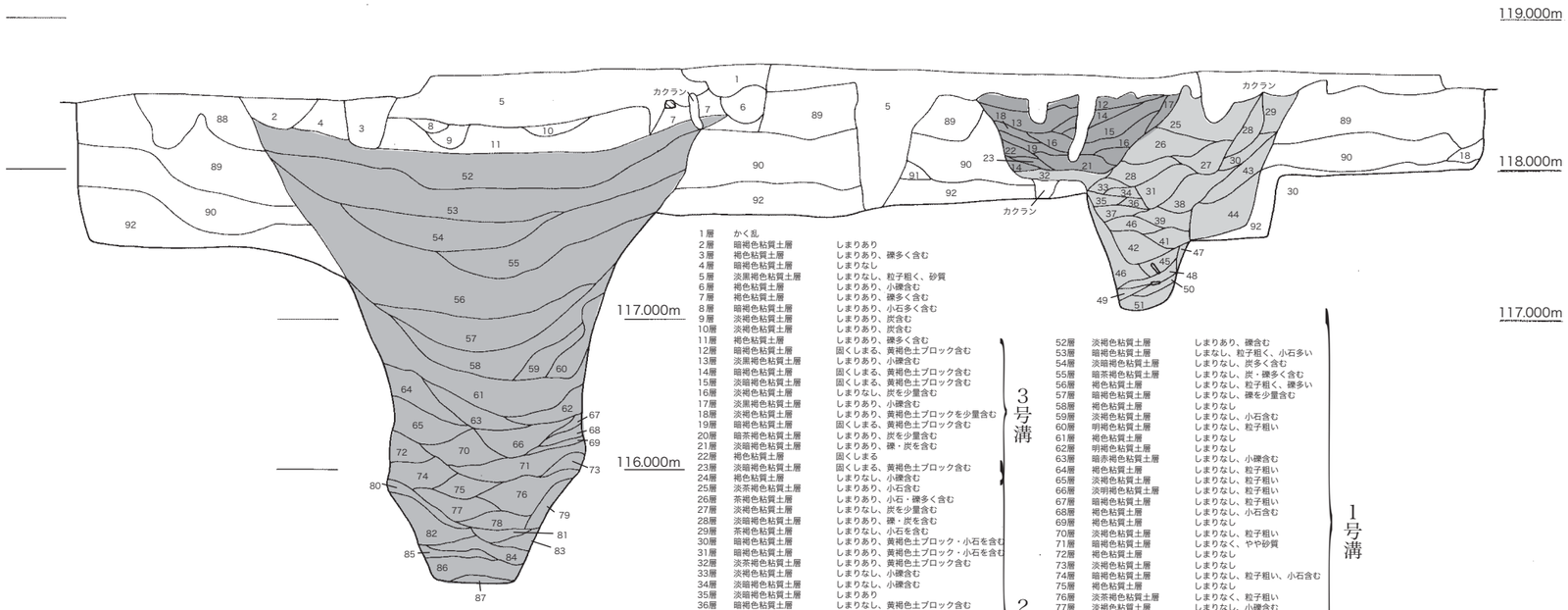
調査区内をほぼ南北方向に伸びる溝状遺構である。調査区北側で１号溝を切り、検出した部分全体にわたり、３号溝に切られる。１トレンチで確認できた溝の幅は約 5.6 ｍで、調査区南側では約 1.9 ｍと狭くなっている。底面の幅は約 0.3 ～ 0.7 ｍで、ほぼ平坦になっている。底面のレベルは確認を行った２～４トレンチでは 117.10 ｍ前後でほぼ同じであるが、１トレンチでは約 116.60 ｍと 0.5 ｍほど低くなっており、北に向かって傾斜していることがわかる。また、検出面からの深さは２・３トレンチでは約 1.5 ｍ、１トレンチでは約 1.9 ｍ、４トレンチでは約 1.2 ｍである。溝の断面形はおおむね「Y」字状を呈し、底面から上に 0.5 ～１ｍの高さで約 15 ～ 20°、それより上は約 50 ～ 60°の傾斜を持つ。溝の方位は凡そＮ－ 30°－Wを向く。

また、１トレンチの 13 ～ 19 層、３トレンチの 25 ～ 42 層、４ｂトレンチの 15 ～ 29 層の堆積状況から、１号溝と同様に２号溝も埋没後に掘り直された可能性が考えられる。この掘り直し時の下層レベルは４、３、１トレンチの順に南から北へ向かって、レベルが下がっている。

出土遺物（第８図　図版 16）

１～８は弥生土器壺である。１は二重口縁壺の口縁部で溝の最下層より出土した。口縁の屈曲部は摘み出すように成形され、上部は丸味を帯びながら内傾しており、先端部には沈線が施される。調整は外面がナデ・ハケ、内面はナデ・ハケ・指押さえがみられる。２も二重口縁壺の口縁部である。上部は欠損しているが、屈曲部の残存状況から１と比べて外に開くと思われる。３は頸部から胴部中位にかけて残存している。頸部の屈曲状況から突帯を貼付けていたと思われる。外面にはハケ、内面にはハケ・ナデ・指押さえが施される。４～６は２と同様に胴部上部である。４は断面台形の突帯を貼り付け、外面・内面ともにハケ・ナデを施す。５は断面三角形の低い突帯を貼り付け、外面にはナデ、内面にはナデ・指押さえを施す。６は胴部下部で、中位よりやや下に断面台形・四角形の突帯を２条貼り付けている。外面にはハケ・ナデ、内面にはナデを施す。７は底部である。底部端からやや内湾気味に約１㎝立ち上がり、そこから大きく外反する。底面はレンズ状を呈し、外面にはハケ･ナデ、内面にはハケ・ナデ、指押さえを施す。

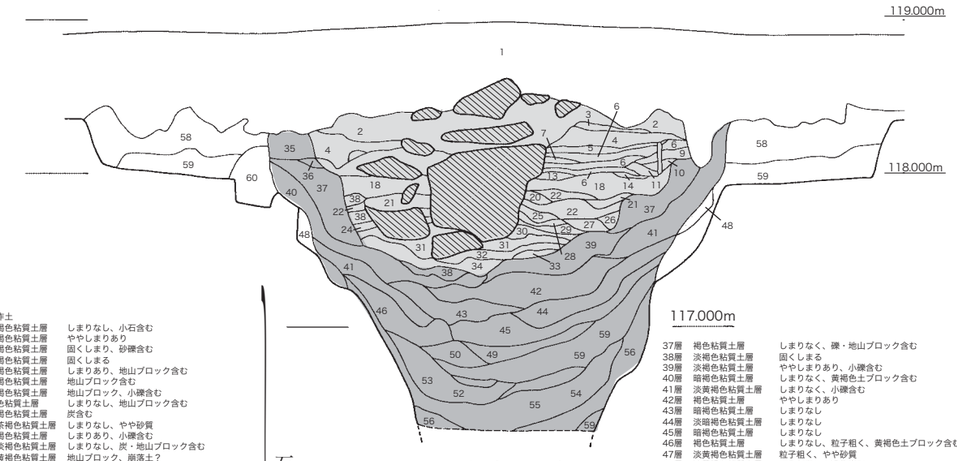
８は甕の底部である。底部は平底を呈し、外面にはハケ・ナデ、内面にはナデ・指押さえを施す。



1層	かく乱	
2層	暗褐色粘質土層	しまりあり
3層	褐色粘質土層	しまりあり、礫多く含む
4層	暗褐色粘質土層	しまりなし
5層	淡黒褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗く、砂質
6層	褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
7層	褐色粘質土層	しまりあり、礫多く含む
8層	暗褐色粘質土層	しまりあり、小石多く含む
9層	淡褐色粘質土層	しまりあり、炭含む
10層	淡褐色粘質土層	しまりあり、炭含む
11層	褐色粘質土層	しまりあり、礫多く含む
12層	暗褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック含む
13層	淡黒褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
14層	暗褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック含む
15層	淡暗褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック含む
16層	淡褐色粘質土層	しまりなし、炭を少量含む
17層	淡黒褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
18層	淡褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロックを少量含む
19層	暗褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック含む
20層	暗茶褐色粘質土層	しまりあり、炭を少量含む
21層	淡暗褐色粘質土層	しまりあり、礫・炭を含む
22層	褐色粘質土層	固くしまる
23層	淡暗褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック含む
24層	褐色粘質土層	しまりなし、小礫含む
25層	淡茶褐色粘質土層	しまりあり、小石含む
26層	茶褐色粘質土層	しまりあり、小石・礫多く含む
27層	淡褐色粘質土層	しまりなし、炭を少量含む
28層	淡暗褐色粘質土層	しまりあり、礫・炭を含む
29層	茶褐色粘質土層	しまりなし、小石を含む
30層	暗褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロック・小石を含む
31層	暗褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロック・小石を含む
32層	淡茶褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロック含む
33層	淡褐色粘質土層	しまりなし、小礫含む
34層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし、小礫含む
35層	淡暗褐色粘質土層	しまりあり
36層	暗褐色粘質土層	しまりなし、黄褐色土ブロック含む
37層	茶褐色粘質土層	しまりあり
38層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、砂礫含む
39層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし
40層	暗褐色粘質土層	固くしまり、小石を含む
41層	淡茶褐色粘質土層	しまりなく、粒子粗い、小石を含む
42層	淡茶褐色粘質土層	しまりなし
43層	淡茶褐色粘質土層	しまりなし
44層	茶褐色粘質土層	しまりなし、黄褐色土ブロック含む
45層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、炭・礫を含む
46層	淡黄褐色粘質土層	粒子粗く、やや砂質
47層	淡黄褐色粘質土層	粒子粗く、やや砂質
48層	淡黒褐色粘質土層	しまりなし、遺物含む
49層	淡茶褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
50層	黒褐色粘質土層	しまりなし
51層	淡黒褐色粘質土層	しまりなし、黄褐色土ブロック含む
52層	淡褐色粘質土層	しまりあり、礫含む
53層	暗褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗く、小石多い
54層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし、炭多く含む
55層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、炭・礫多く含む
56層	褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗く、礫多い
57層	暗褐色粘質土層	しまりなし、礫を少量含む
58層	褐色粘質土層	しまりなし
59層	淡褐色粘質土層	しまりなし、小石含む
60層	明褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
61層	褐色粘質土層	しまりなし
62層	明褐色粘質土層	しまりなし
63層	暗赤褐色粘質土層	しまりなし、小礫含む
64層	褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
65層	淡褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
66層	淡明褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
67層	暗褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
68層	褐色粘質土層	しまりなし、小石含む
69層	褐色粘質土層	しまりなし
70層	淡褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
71層	暗褐色粘質土層	しまりなく、やや砂質
72層	褐色粘質土層	しまりなし
73層	淡褐色粘質土層	しまりなし
74層	暗褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い、小石含む
75層	褐色粘質土層	しまりなし
76層	淡茶褐色粘質土層	しまりなく、粒子粗い
77層	淡褐色粘質土層	しまりなし、小礫含む
78層	茶褐色粘質土層	しまりなし
79層	明褐色粘質土層	しまりなし、崩落土
80層	褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
81層	淡褐色粘質土層	しまりなし、砂粒含む
82層	茶褐色砂質土層	砂礫層の崩落
83層	暗褐色粘質土層	しまりなし、砂礫含む
84層	淡茶褐色粘質土層	砂礫を多く含む
85層	暗褐色粘質土層	砂含む
86層	黒褐色砂礫土層	崩落土
87層	茶褐色砂礫土層	崩落土
88層	茶褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
89層	淡褐色粘質土層	しまりあり、小礫多く含む
90層	淡黒褐色粘質土層	黒ボク
91層	淡茶褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
92層	淡褐色粘質土層	しまりなし、礫含む
93層	暗褐色粘質土層	しまりあり、遺構埋土

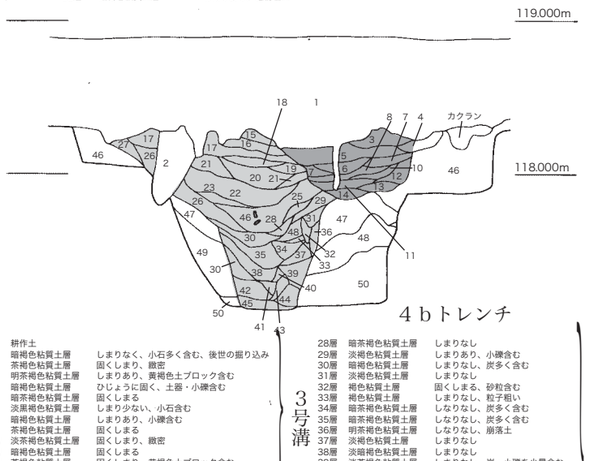
3号溝　2号溝　1号溝

0　1m



1層	耕作土	
2層	暗褐色粘質土層	しまりなし、小石含む
3層	茶褐色粘質土層	ややしまりあり
4層	黒褐色粘質土層	固くしまり、砂礫含む
5層	茶褐色粘質土層	固くしまる
6層	暗褐色粘質土層	しまりあり、地山ブロック含む
7層	茶褐色粘質土層	地山ブロック含む
8層	暗褐色粘質土層	地山ブロック、小礫含む
9層	褐色粘質土層	しまりなし、地山ブロック含む
10層	茶褐色粘質土層	炭含む
11層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、やや砂質
12層	黒褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
13層	暗淡褐色粘質土層	しまりなし、炭・地山ブロック含む
14層	明黄褐色粘質土層	地山ブロック、崩落土？
15層	黒褐色粘質土層	固くしまり、小石含む
16層	黒褐色粘質土層	しまりなし
17層	暗褐色粘質土層	ややしまりあり、小礫含む
18層	暗茶褐色粘質土層	ややしまる、1~2cmの黄褐色ブロック含む
19層	茶褐色粘質土層	しまりあり、粒子粗い
20層	暗褐色粘質土層	しまりなく、粒子粗い、地山ブロック含む
21層	褐色砂質土層	しまりなく、粒子粗い
22層	暗茶褐色粘質土層	
23層	暗褐色粘質土層	しまりあり
24層	暗褐色粘質土層	しまりなし
25層	明褐色粘質土層	しまりあり、粒子粗い
26層	淡褐色粘質土層	しまりなし、1~2cmの礫含む
27層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし、黄褐色ブロック含む
28層	暗褐色粘質土層	しまりなし、小礫少量含む
29層	黒褐色粘質土層	しまりなし、黄褐色ブロック含む
30層	褐色粘質土層	黄褐色ブロック多く含む
31層	暗褐色粘質土層	しまりなし、地山ブロック含む
32層	暗褐色粘質土層	しまりなし
33層	黒褐色粘質土層	しまりなし、小礫含む
34層	暗褐色粘質土層	地山ブロック含む
35層	暗褐色粘質土層	しまりなし、やや砂質
36層	淡褐色粘質土層	固くしまり、小礫含む
37層	褐色粘質土層	しまりなく、礫・地山ブロック含む
38層	淡褐色粘質土層	固くしまる
39層	淡褐色粘質土層	ややしまりあり、小礫含む
40層	暗褐色粘質土層	しまりなく、黄褐色土ブロック含む
41層	淡黄褐色粘質土層	しまりなく、小礫含む
42層	褐色粘質土層	ややしまりあり
43層	暗褐色粘質土層	しまりなし
44層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし
45層	暗褐色粘質土層	しまりなし
46層	褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗く、黄褐色土ブロック含む
47層	淡黄褐色粘質土層	粒子粗く、やや砂質
48層	淡黒褐色粘質土層	しまりなし、遺物含む
49層	暗褐色粘質土層	しまりなく、炭含む
50層	褐色粘質土層	しまりなく、粒子粗い
51層	淡褐色粘質土層	しまりなく、粒子粗い
52層	暗褐色粘質土層	しまりなく、黄褐色土ブロック含む
53層	褐色粘質土層	しまりなく、小礫含む
54層	暗褐色粘質土層	しまりなく、黄褐色土ブロック・小石を含む
55層	明茶褐色粘質土層	しまりなく、小礫含む
56層	茶褐色粘質土層	しまりなし、崩落土
57層	暗茶褐色粘質土層	しまりなく、粒子粗い
58層	淡茶褐色粘質土層	固くしまる、黒ボク
59層	黄褐色粘質土層	ローム層
60層	茶褐色粘質土層	しまりなし

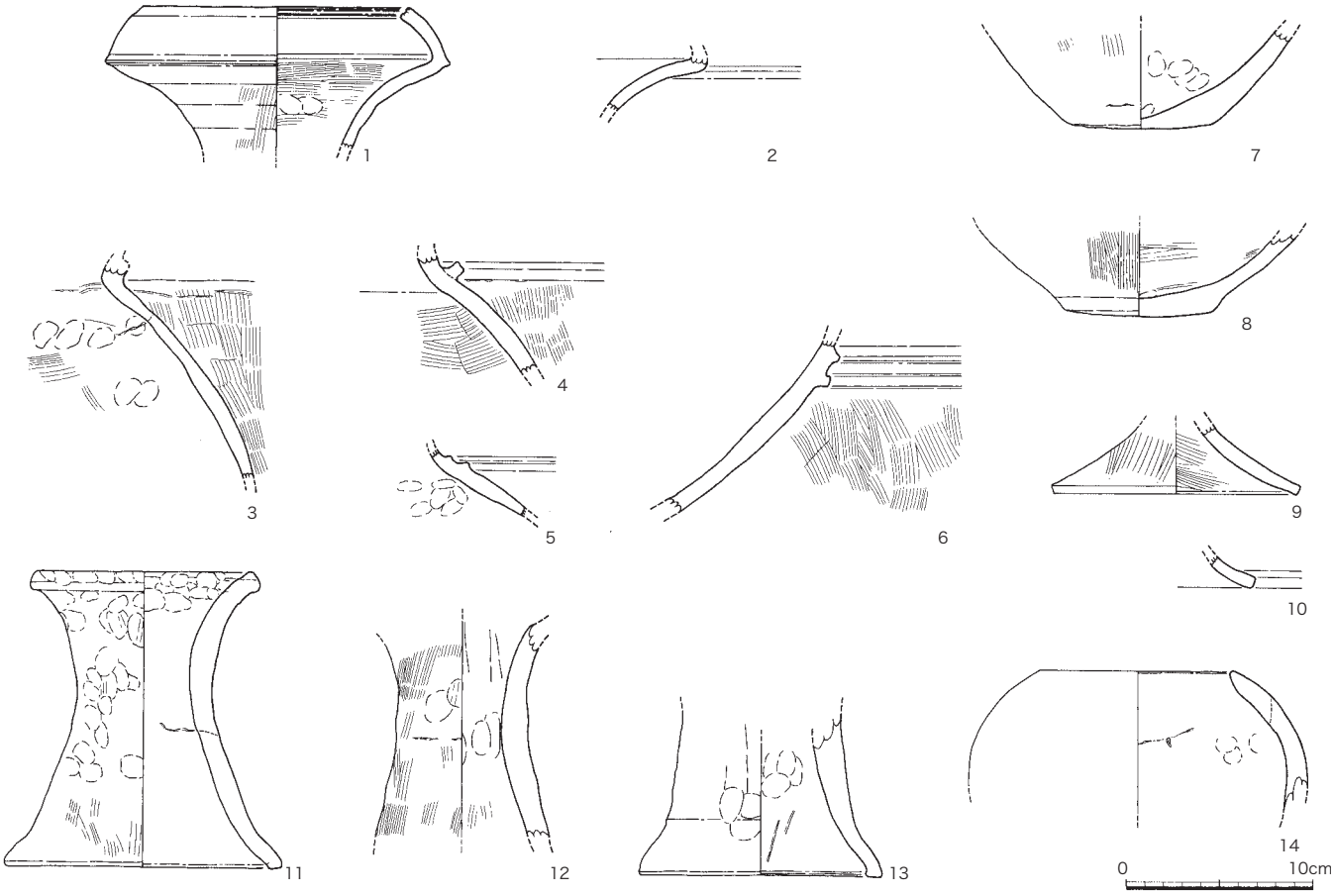
1号溝



1層	耕作土	
2層	暗褐色粘質土層	しまりなく、小石多く含む、後世の掘り込み
3層	茶褐色粘質土層	固くしまり、緻密
4層	明茶褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロック含む
5層	暗褐色粘質土層	ひじょうに固く、土器・小礫含む
6層	暗茶褐色粘質土層	固くしまる
7層	淡黒褐色粘質土層	しまりなく、小石含む
8層	暗褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
9層	茶褐色粘質土層	固くしまる
10層	淡茶褐色粘質土層	固くしまり、緻密
11層	暗褐色粘質土層	固くしまる
12層	茶褐色粘質土層	固くしまり、黄褐色土ブロック含む
13層	暗褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロック含む
14層	淡暗褐色粘質土層	しまりあり、黄褐色土ブロック含む
15層	暗褐色粘質土層	しまりあり、炭含む
16層	淡茶褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
17層	茶褐色粘質土層	しまりあり、炭・焼土含む
18層	暗褐色粘質土層	しまりあり、粒子がやや粗い
19層	淡茶褐色粘質土層	固くしまり、小礫含む
20層	暗褐色粘質土層	しまりあり、小礫・焼土含む
21層	茶褐色粘質土層	固くしまり、黄褐色土ブロック・炭含む
22層	淡黒褐色粘質土層	しまりあり、炭・礫含む
23層	淡褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
24層	暗褐色粘質土層	しまりなし、炭・土器を多く含む
25層	淡茶褐色粘質土層	しまりあり
26層	暗褐色粘質土層	しまりなし、やや砂質
27層	淡茶褐色粘質土層	しまりあり
28層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし
29層	淡褐色粘質土層	しまりあり、小礫含む
30層	暗褐色粘質土層	しまりなし、炭多く含む
31層	淡褐色粘質土層	しまりなし
32層	褐色粘質土層	固くしまる、砂粒含む
33層	褐色粘質土層	しまりなし、粒子粗い
34層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、炭多く含む
35層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、炭多く含む
36層	明茶褐色粘質土層	しまりなし、崩落土
37層	淡褐色粘質土層	しまりなし
38層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし
39層	淡茶褐色粘質土層	しまりなし、炭・小礫を少量含む
40層	淡暗褐色粘質土層	しまりなし、2~3cmの小石含む
41層	茶褐色粘質土層	しまりなし、粒子やや粗い
42層	暗褐色粘質土層	しまりなし、炭含む
43層	淡黄褐色粘質土層	しまりなし、小石含む
44層	褐色粘質土層	しまりなし
45層	暗茶褐色粘質土層	しまりなし、炭含む
46層	黄褐色粘質土層	地山
47層	暗褐色粘質土層	しまりなく、黄褐色土ブロック含む
48層	暗黄褐色粘質土層	地山、固くしまる
49層	暗黄褐色粘質土層	地山、固くしまり、礫多く含む
50層	明褐色粘質土層	地山、しまりなく、崩落土

3号溝　2号溝　2号溝

第７図　３・４a・４ｂトレンチ土層図（1/40）

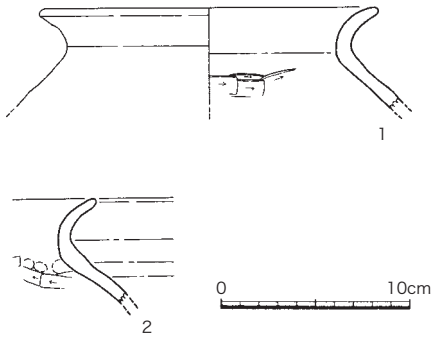


第８図　２号溝出土遺物実測図（1/4）

９・10 は高坏の脚部である。９は脚端部を角張らせて仕上げ、外面・内面ともにハケ・ナデを施す。10 は９に比べ、脚端部を丸く仕上げる。器面は磨滅しており、調整は不明である。

11 ～ 13 は器台である。11 は口縁端部をやや肥厚させ、底部はやや内湾させている。13 も 11 と同じく底部をやや内湾させている。

14 は無頸壺である。口縁端部は薄く、丸味を帯びている。



第９図　３号溝出土遺物実測図（1/4）

３号溝（第５～７図　図版１～４）

調査区内をほぼ南北方向に伸びる溝状遺構である。調査区北側で１号溝を切り、検出した部分全体にわたり、２号溝を切る。溝の幅は検出面で約 1.9 ～ 2.1 mで、底面の幅は約 0.7 ～ 1.1 mである。底面のレベルは 117.60 ～ 118.00 mであったが、調査区中央の３トレンチが最も高く、南北両方向へ下がっていた。また、検出面からの深さは２トレンチが約１m、それ以外のトレンチでは 0.5 ～ 0.6 mである。溝の断面はおおむね逆台形状を呈し、約 20°傾斜を持つ。溝の方位は凡そＮ－ 30°－Wを向く。

出土遺物（第９図　図版 16）

１・２は土師器甕である。１は口縁端部を丸く仕上げ、頸部内面の屈曲は丸く仕上げる。外面にはナデ、内面

は口縁部にナデ、頸部にはケズリが施される。２は１と同様に口縁端部を丸く仕上げ、頸部内面の屈曲は丸く仕上げる。外面にはナデ、内面は口縁部にナデ、頸部にはケズリが施される。

（3）墓

墓は箱式石棺墓・石棺系竪穴式石室が西側調査区に６基、東側調査区に１基の合計７基確認された。これらの墓の調査については、内部の完掘は行ったが、掘り方や控え積の確認は主軸上のトレンチのみで行ったため、正確な規模や形状が判明していないものもある。

１号墓（第 10 図　図版５）

西側調査区の西側で確認され、主軸をＮ－ 95°－Ｗにとり、東に頭位を置く箱式石棺である。

墓坑は削平をうけており、確認できなかった。棺材については、蓋石はなく、棺身は北側長側辺の破片と東側小口板が残っているのみであった。

石棺の規模は確認された掘り方から、内法で長軸上 1.76 m、短軸上 0.46 m、西側小口幅が 0.29 m、東側小口幅が 0.47 mであった。床面や棺身に赤色顔料は認められなかった。また､床面からの高さは 0.30 mである。

棺身は掘り方から、両長側辺は３枚ずつで、北側は大型の石材２枚と小型の石材１枚で構成され、一方、南側は中央に大型の石材を、その左右にやや小型の石材を配していることが確認できた。また、西側小口板は１枚である。

遺物は埋土中より土師器片が出土している。

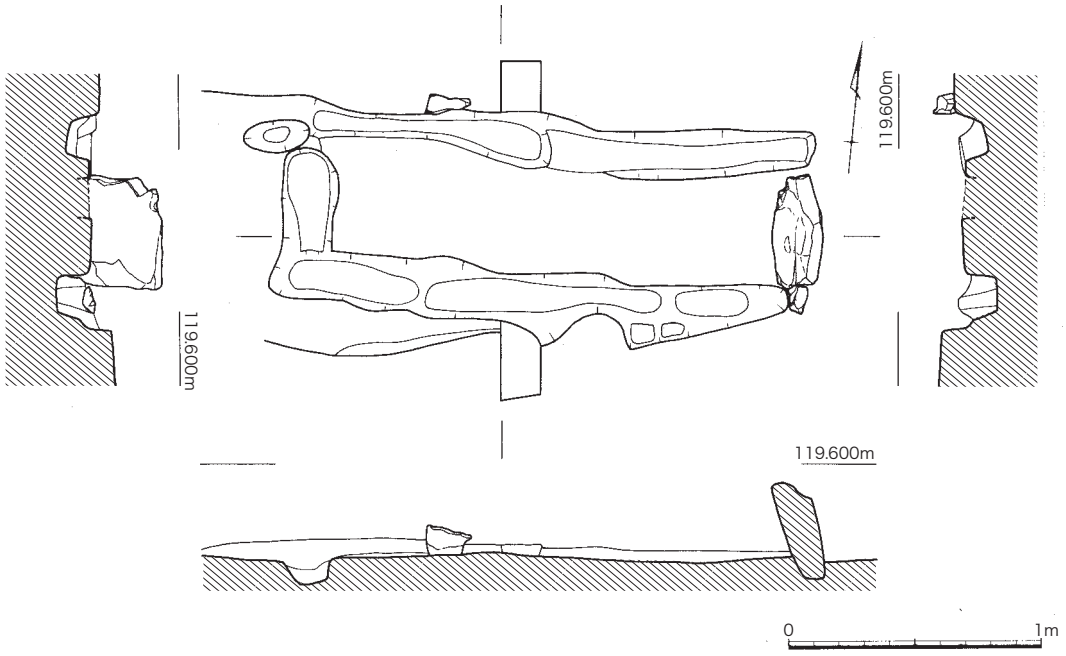
２号墓（第 11 図　図版５～７）

１号墓の東側約９m確認され、主軸をＮ－ 104°－Ｗにとり、西に頭位を置く箱式石棺である。

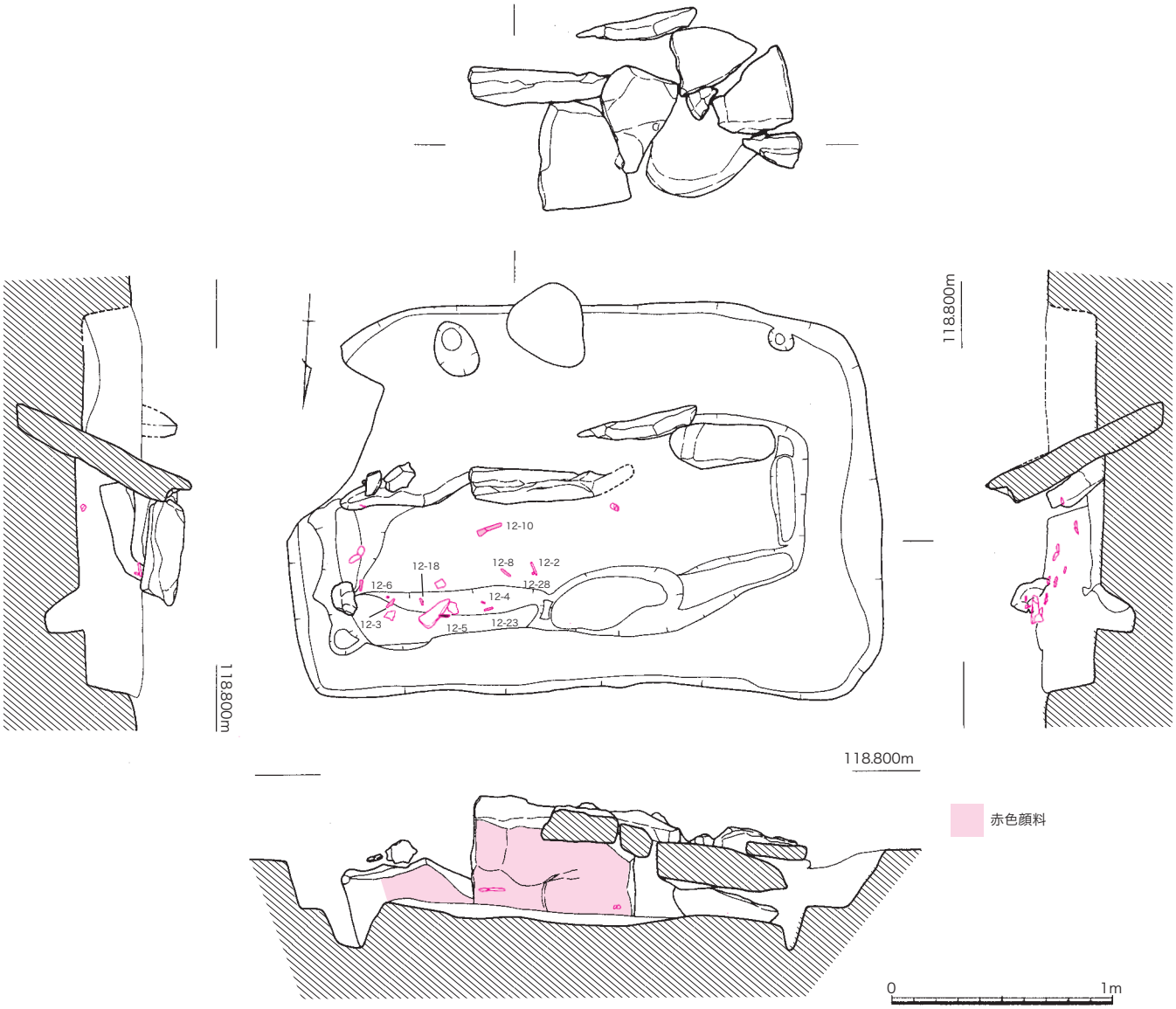
墓坑は隅丸方形を呈し、規模は長軸上が 2.73 m、短軸上が 1.78 mである。

石棺の蓋石は破壊された状態で、中央より西側に６枚ほど確認され、破片の大きさより、本来は３枚程度あったと推測される。このことから全体では６枚前後の蓋石が存在していたと考えられる。

石棺の規模は残存している棺材と掘り方から､内法で長軸上 1.91 m､短軸上 0.60 m､西側小口幅が 0.41 m､東側小口幅が 0.36 mである。床面に敷石・石枕等は認められなかった。また、床面からの高さは最も高いところで 0.55 ㎝である。



第 10 図　１号墓実測図（1/30）



第 11 図　2号墓実測図（1/30）

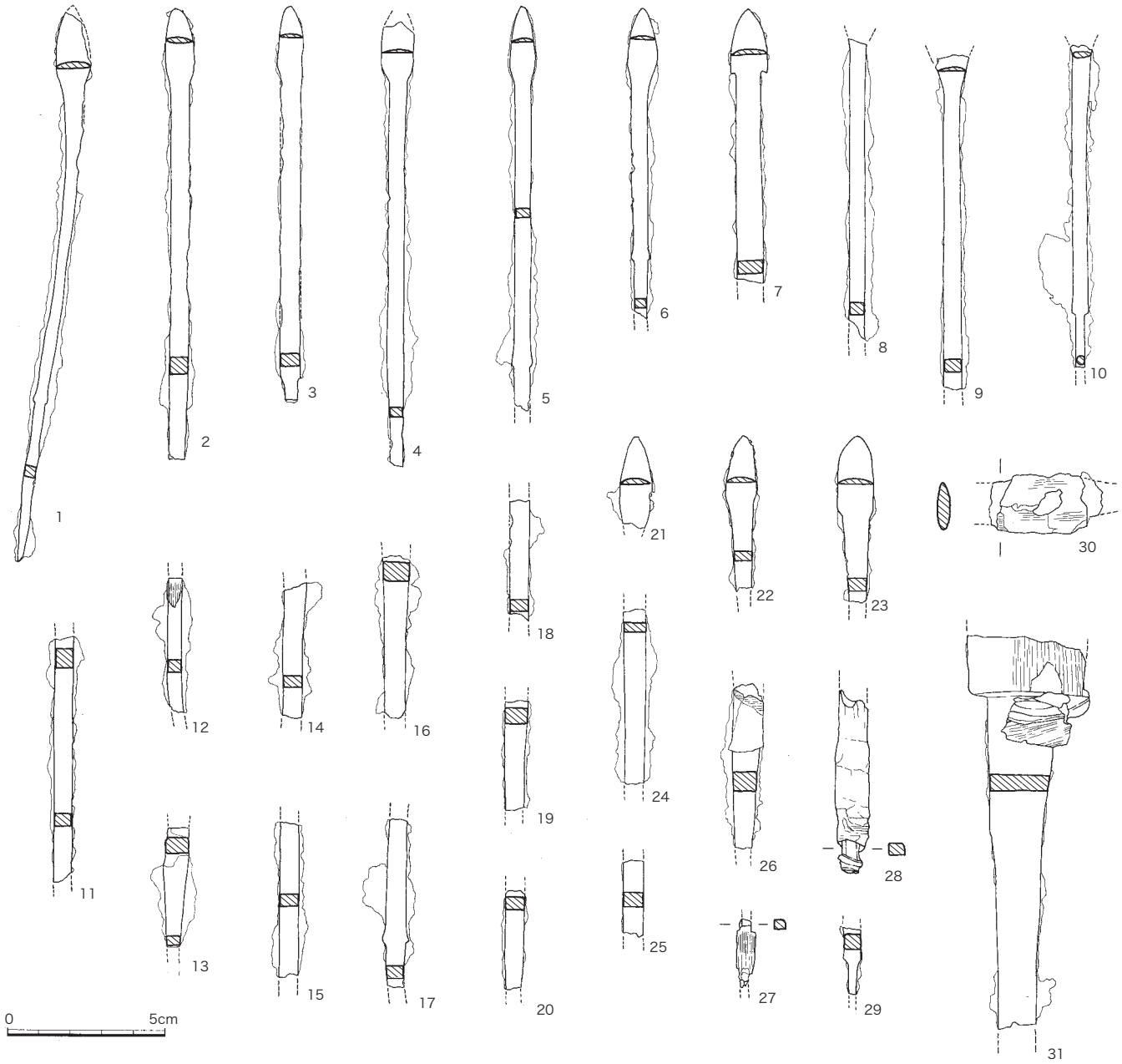
棺身は南側長側辺にほぼ同じ大きさの板石が４枚残存しており、北側長側辺は掘り方から３枚あったことが確認できた。また、南側長側辺は何れも内側に大きく内傾している。また、小口板は両方とも確認できなったが、掘り方から１枚ずつであったことがわかる。また、棺身や床面の一部に赤色顔料が認められた。

遺物は土師器片・大量の鉄鏃等が出土している。この他、人骨片が確認された。

出土遺物（第 12 図　図版 17）

鉄鏃は合計で 29 本出土した。すべて長頸鏃で、うち鏃身形態のわかるのは 10 本である。１～７・21 ～ 23 は柳葉式である。これらの鉄鏃の鏃身部の断面形態は２が両丸造で、それ以外は１、３～９、11 が片丸造である。

さらに関の形態が逆刺状になる７と、鈍角をなす、もしくは不明瞭なものがそれ以外となる。また、８～ 10 については関が辛うじて残存している状況であるが、鏃身形態は柳葉形になると思われる。さらに頸部の形態をみると、篦被がみられるものは１・３・５・６・10・17・27 ～ 29 で、棘状に突出するもの（１・５・６・27・28）と篦被部と同じ幅で茎部が細くなる（３・10・28）ものの２種類がみられる。また、12・26 ～ 28 は木質が残存する。30 は刀子の柄部である。大部分に木質が残る。31 は鉄刀の把部である。鍔と柄が残存し



第 12 図　２号墓出土遺物実測図（1/2）

ており、一部に木質が残存する。鍔の幅は 3.7 ㎝、把縁の幅は 2.2 ㎝あり、把頭に向かって徐々に細くなり、残存部分の先端で 1.2 ㎝となる。厚さは 0.5 ㎝である。

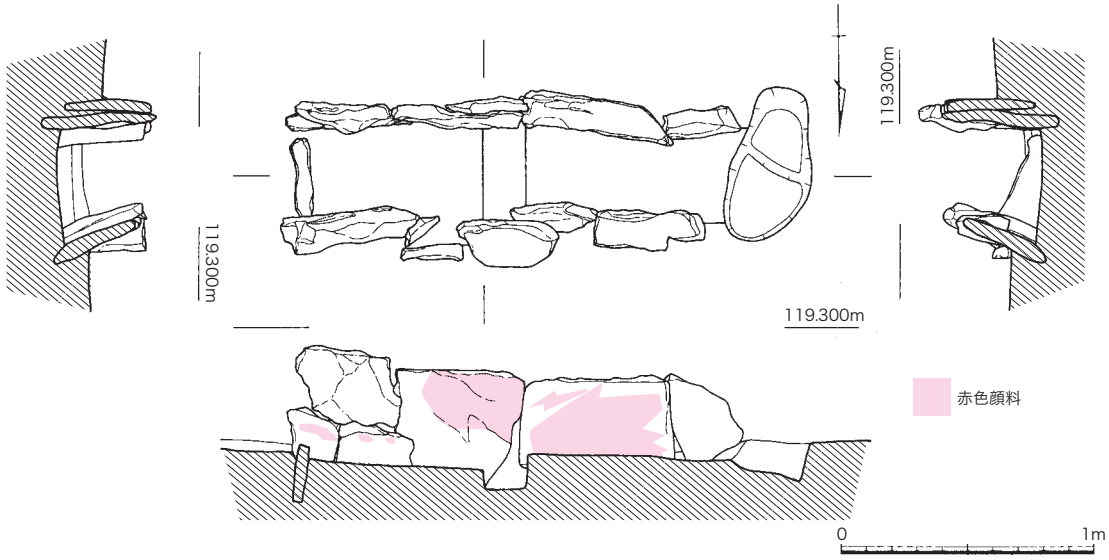
３号墓（第 13 図　図版７）

２号墓の東側約８m確認され、主軸をＮ－ 91°－Ｅにとり、東に頭位を置く箱式石棺である。

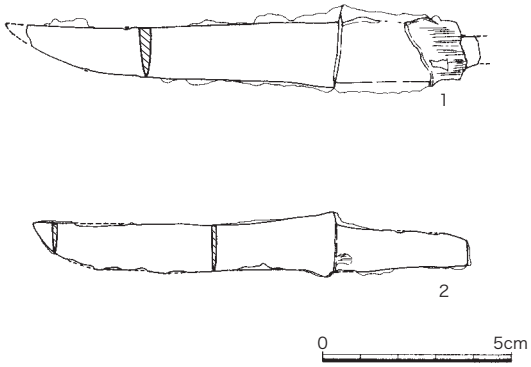
墓坑は削平をうけており、確認できなかった。また、蓋石は残存していなかった。

石棺の規模は残存している棺材と掘り方から、内法で長軸上 1.67 m、短軸上 0.46 m、西側小口幅が 0.32 m、東側小口幅が 0.39 mであることが確認できた。床面に敷石・石枕等は認められなかった。また、床面からの高さは最も高いところで 0.46 mであり、その他の板石は上部に板石を重ねるか、粘土を充填していた可能性ある。

棺身は北側長側辺では大小５枚の板石を立てている。これに対し、南側長側辺は東側で２枚の基底石の上に１枚の板石を置いたり、板石を二重に重ねている。また、北側長側辺はいずれの板石も内傾している。小口板は



第 13 図　３号墓実測図（1/30）



第 14 図　３号墓出土遺物実測図（1/2）

東側の１枚が残っていたが、長側辺に比べて低いため、その上部に数枚板石を重ねていた可能性がある。

この他、ほとんどの板石に赤色顔料が認められた。

遺物は土師器片と刀子が出土している。

出土遺物（第 14 図　図版 18）

１・２は刀子である、１は刃先が欠損し、現存長 12.0 ㎝、現存刃部長 8.2 ㎝である。刃部先端や上方にやや反り気味である。茎部の大部分には木質が残る。２は刃部の一部を欠損しているものの、ほぼ完形である。全長 11.5 ㎝、刃部長 4.9 ㎝である。刃部は１に比べ、直線的である。茎部のごく一部に木質が残る。

４号墓（第 15・16 図　図版８～ 10）

３号墓の東側約７ｍで確認され、主軸をＮ－ 70°－Ｅにとり、南西に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

墓坑は北半分が削平されているが、主軸上に設定したトレンチから長軸 3.24 m、短軸 2.16 mであることが確認できた。墓坑の東側は２段掘りとなっている。

石室の蓋石は、凝灰岩製の大石２枚が用いられており、西側が主軸長 0.85 m、最大幅 0.85 m、最大厚 0.15 m、東側が主軸長 1.38 m、最大幅 1.2 m、最大厚 0.14 mの板状の石材である。また、この２枚の蓋石は重なることなく置かれており、この２枚の隙間を大小の小石を数個充填して配されていた。

石室の規模は床面での長さは主軸上で 1.66 m、幅は短軸上で 0.56 m、東端で 0.56 m、西端で 0.57 mを測り、床面には、石枕・敷石等は設けられず、地山を床としている。床面は東側から西側に向かって傾斜しており、東西両端でのレベル差は５㎝である。さらに上面での規模は、長さが主軸上で 1.48 m、幅が短軸上で 0.63 mで、床面の規模と比べると、長軸方向ではやや内傾しながら壁体を構築しているのに対し、短軸方向では若干上部が開くものの、ほぼ直線的に構築している。

左右長側壁は基底部から安山岩製板石を６～７段にわたり、平積みを行っている。積み石の最上段から石室底までは 0.75 mを測る。壁体の最下部は長さ・幅とも大ぶりな石を用いており、上部にいくほど小ぶりになっている。また、上部の方は石材の加工が粗いためか、隙間が多く、そこに小石を充填し、目張りに粘土を使用している。

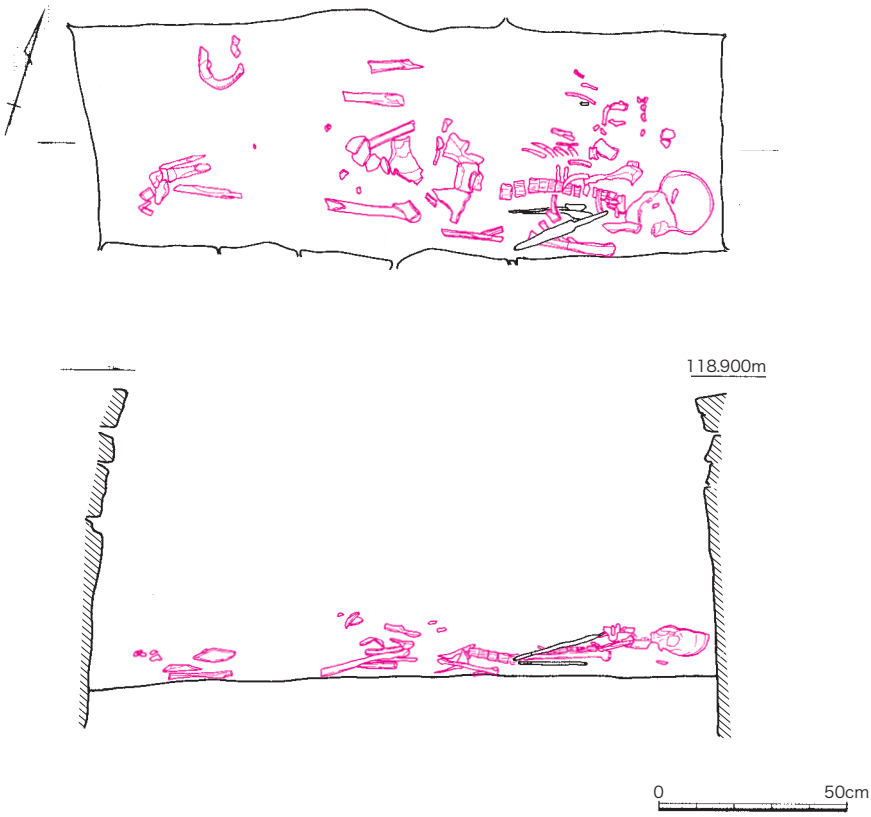
両小口壁は基底石に板石を用い、その上部に３～４段にわたって割石を平積みしている。東側基底石は高さ約 50 ㎝、西側基底石は高さ約 40 ㎝である。西側は基底石の高さが東側より、約 10 ㎝低いため、その上部は東側に比べ大きめの石を用いている。さらに両小口の基底石上面を結ぶライン上で目地が通っており、東側は墓坑の１段目上面のレベルとほぼ同じである。

また、壁面全体に渡って、赤色顔料の塗布が認められた。

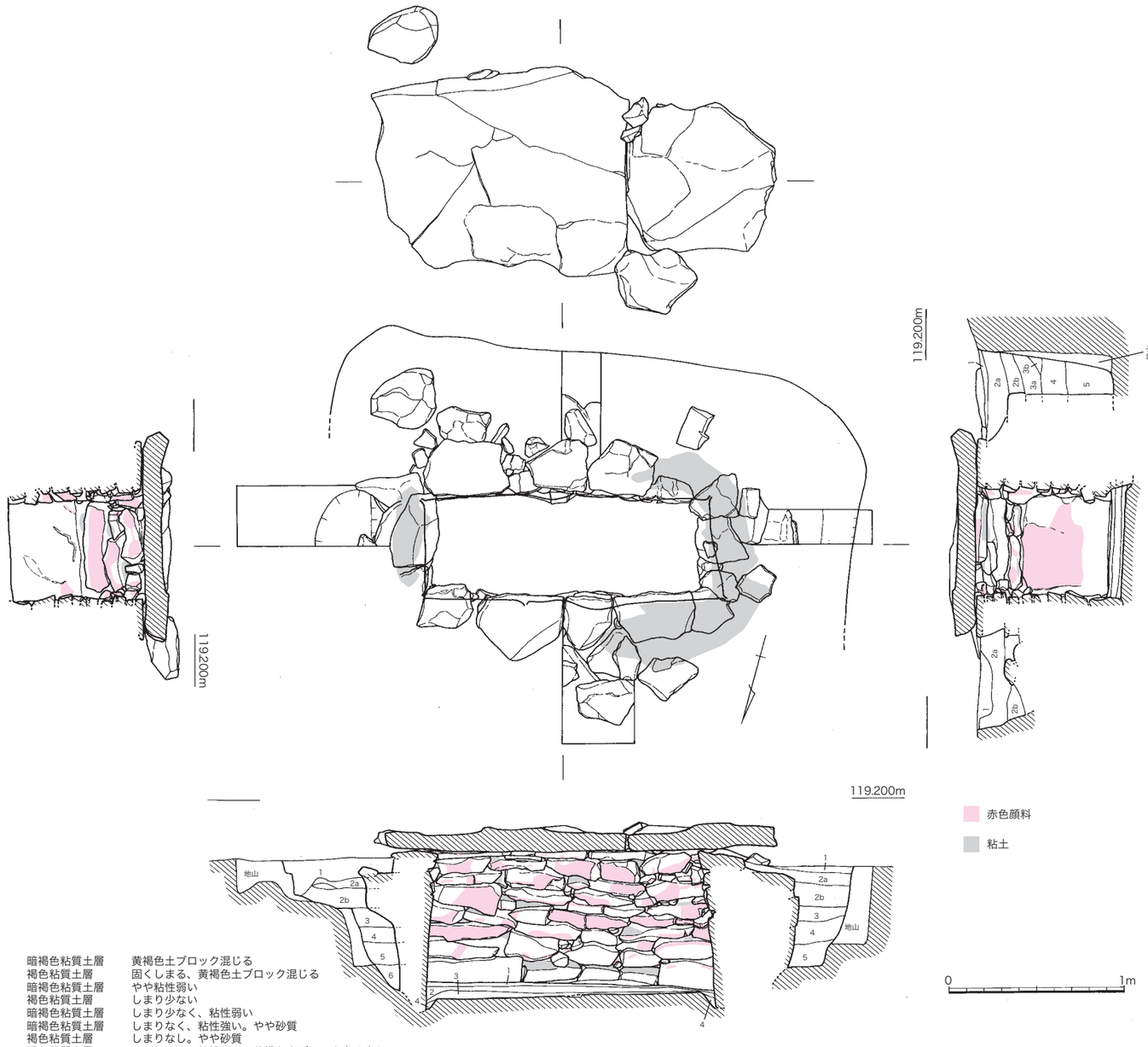
検出面において確認された控え積の石材は、南東側と北西側に多く見られ、また、トレンチにより、２～３重の控え積があることも確認できた。この他に両小口側の最上面には蓋石を据える際に水平に保つための、粘土が貼り付けられている。

石室内からは西頭位の人骨が３体出土している。また、人骨の脇より鉄剣が１本、その他埋土中より鉄剣１本、鉄鏃３本が出土している。

なお、人骨精査中に床面中央付近からビニールなどが確認された。石材の隙間からの流れ込みか、一度開棺



第 15 図　４号墓人骨・遺物出土状況実測図（1/20）



4号墓

1層	暗褐色粘質土層	黄褐色土ブロック混じる
2a層	褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック混じる
2b層	暗褐色粘質土層	やや粘性弱い
3a層	褐色粘質土層	しまり少ない
3b層	暗褐色粘質土層	しまり少なく、粘性弱い
4層	暗褐色粘質土層	しまりなく、粘性強い。やや砂質
5層	褐色粘質土層	しまりなし。やや砂質
6層	褐色粘質土層	しなりなく、粘性強い。黄褐色土ブロック多く含む

4号墓床

1層	暗褐色粘質土層	貼床
2層	褐色粘質土層	固くしまる。緻密。
3層	暗褐色粘質土層	固くしまる
4層	暗褐色粘質土層	しまりなし。

第16図　4号墓実測図（1/30）

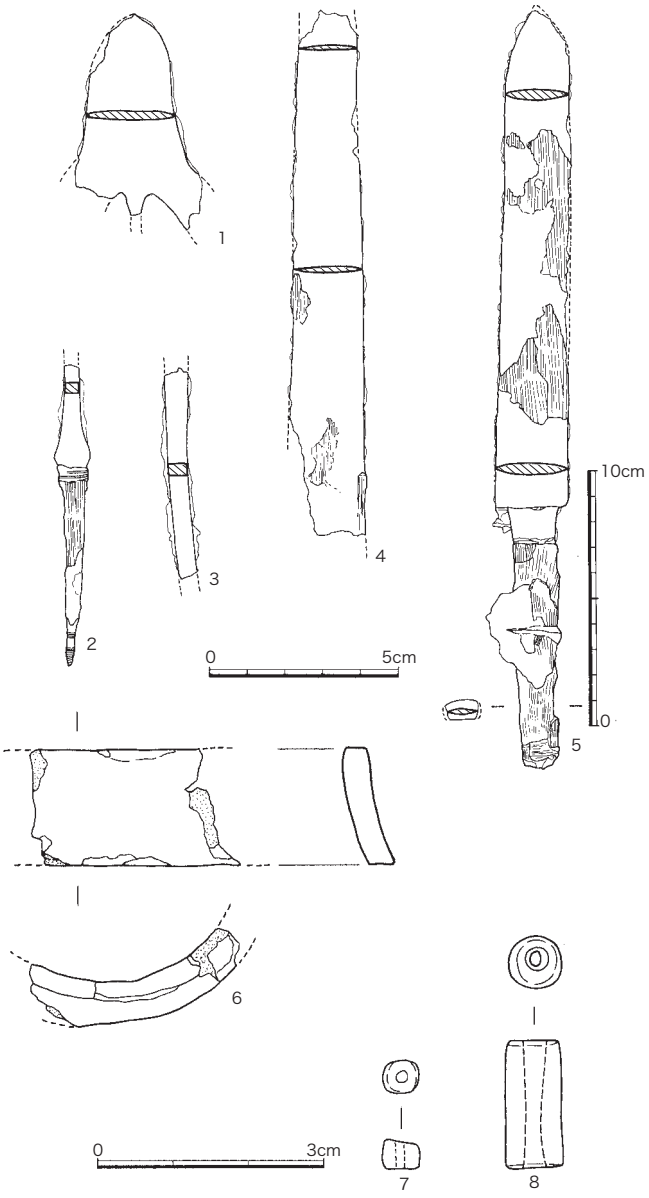
されて再び閉じられたか、調査中に確認できなかったが、蓋石は原位置を留めていない可能性が大きいことを指摘しておく。また、人骨の出土状態等、その所見については後述する。

出土遺物（第 17 図　図版 18）

１は有茎の長三角鏃で逆刺を有する。逆刺部分は左右とも欠損している。２は長頸鏃の頸部で篦被は棘状に突出する。茎部には樹皮が残存している。３も長頸鏃の頸部である。上部の幅が若干広くなっていることかた、篦被もしくは鏃身に近い部位と思われる。４・５は鉄剣である。４は刃部の一部が残存しており、切先は残っていない。残存長は 20.9 ㎝で、鞘の一部とみられる木質がごく一部に残存している。５は切先や刃の一部が破損しているものの、ほぼ完形である。全長 30.2 ㎝、刃部長 19.8 ㎝、刃部幅は元幅で 2.6 ㎝、関部から５㎝ほど下部に鍔が外れた状態で、錆び付いていた。また、把部の大部分には木質が残存している。把部長は 10.4 ㎝、把縁の幅は 1.8 ㎝、把頭の幅は 1.4 ㎝である。

６は鹿角製剣装具の鞘口である。半分ほどが欠損しているが、楕円形を呈すると思われる。高さ 2.3 ㎝。線刻等の文様は認められない。

７はガラス製の小玉である。径 0.4 ㎝、高さ 0.5 ㎝、孔径 0.1 ㎝、重さ 0.1g である。８は碧玉製の管玉である。全長 1.7 ㎝、径 0.8 ㎝、孔径 0.3 ㎝、重さ 1.7g である。濃緑色を呈し、一部に朱の付着が認められる。



第 17 図　４号墓出土遺物実測図
（１～３・６は 1/2、４・５は 1/3、７・８は 1/1）

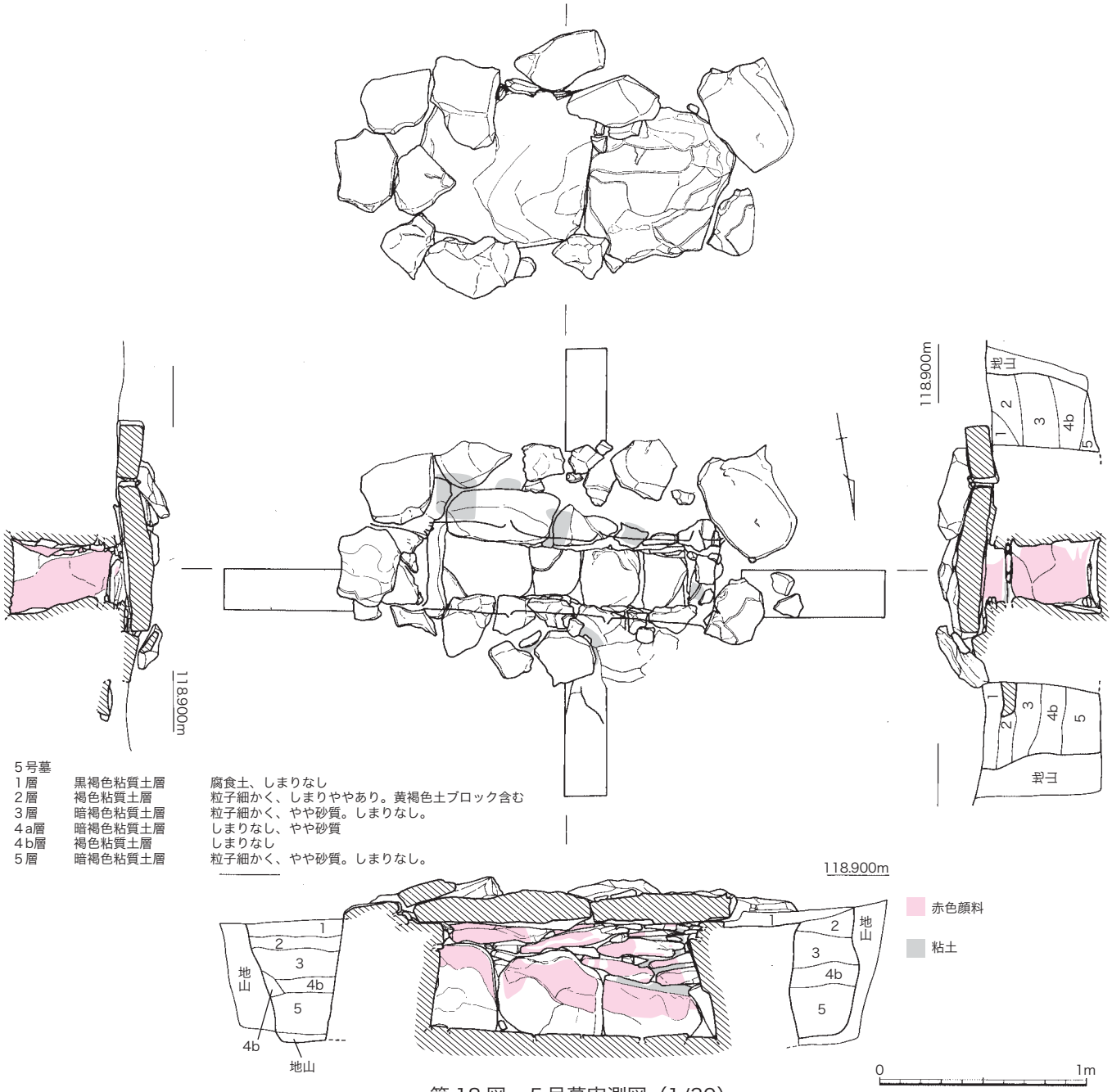
５号墓（第 18・19 図　図版 10 ～ 12）

４号墓の東側約８ｍで確認され、主軸をＮ－ 99°－Ｅにとり、東に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

墓坑は削平を受けており、平面形は確認することができなかったが、規模については主軸上に設定したトレンチから長軸 2.94 ｍ、短軸 1.92 ｍであることが確認できた。

石棺の蓋石は、凝灰岩製の大石２枚が用いられており、西側が主軸長 0.68 ｍ、最大幅 0.73 ｍ、最大厚 0.15 ｍ、東側が主軸長 0.85 ｍ、最大幅 0.77 ｍ、最大厚 0.16 ｍの板状の石材である。また、この２枚の蓋石は重なることなく置かれており、この２枚の隙間を大小の小石を数個充填して配されていた。こうした状況は４号墓とほぼ同様である。

石室の規模は床面での長さは主軸上で 1.39 ｍ、幅は短軸上で 0.36 ｍ、東端で 0.42 ｍ、西端で 0.35 ｍを測り、床面には、５枚の敷石を設け、隙間を小ぶりな石で充填している。床面は東側から西側に向かって傾斜しており、

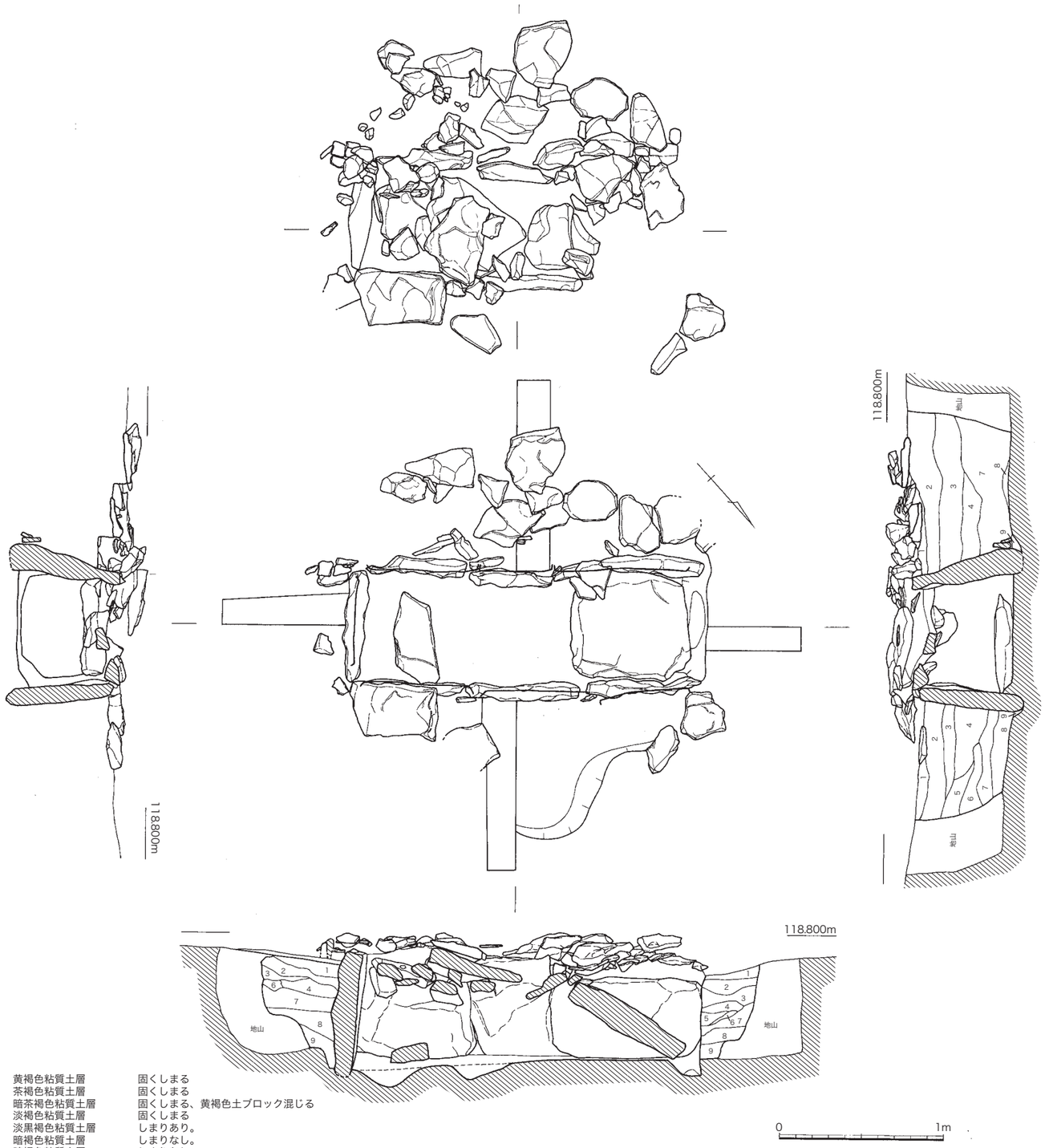


5号墓

1層	黒褐色粘質土層	腐食土、しまりなし
2層	褐色粘質土層	粒子細かく、しまりややあり。黄褐色土ブロック含む
3層	暗褐色粘質土層	粒子細かく、やや砂質。しまりなし。
4a層	暗褐色粘質土層	しまりなし、やや砂質
4b層	褐色粘質土層	しまりなし
5層	暗褐色粘質土層	粒子細かく、やや砂質。しまりなし。

第18図　5号墓実測図（1/30）

第19図　5号墓人骨出土状況実測図（1/20）



6号墓

1層	黄褐色粘質土層	固くしまる
2層	茶褐色粘質土層	固くしまる
3層	暗茶褐色粘質土層	固くしまる、黄褐色土ブロック混じる
4層	淡褐色粘質土層	固くしまる
5層	淡黒褐色粘質土層	しまりあり。
6層	暗褐色粘質土層	しまりなし。
7層	暗褐色粘質土層	しまりなし。
8層	褐色粘質土層	しまりあり。
9層	暗褐色粘質土層	しまりなし。

第 20 図　6号墓実測図（1/30）

東西両端でのレベル差は７㎝である。また、石枕は認められなかった。さらに上面での規模は、長さが主軸上で 1.24 m、幅が短軸上で 0.28 mであるで、床面の規模と比べると、長軸・短軸方向ともにやや内傾気味に壁を構築している。

左右長側壁は基底部に安山岩製の３枚の板石を立てて構築しているが、東側から西側へ向かって、順に低くなっている。右長側壁は床面からの高さが東側から 42 ㎝、40 ㎝、25 ㎝となっている。この基底石上部の構造は、まず、西側の最も低い石材の上に割石を３段積み、東側の基底石上面とレベルを合わせている。このレベルは掘り方の３層上面とも一致し、目地が通っていることが確認できる。さらに上部にかけて、３段の板石を積み、床面から約 50 ㎝でレベルを揃えている。また、４号墓と同様に上部の石材は加工が粗いため、隙間に小石や粘土の充填が見られる。

両小口壁は基底石に板石を用い、その上部に１段の板石を据え、隙間を小ぶりな石材で充填している。東側基底石は高さ約 40 ㎝、西側基底石は高さ約 45 ㎝である。さらに最上段の上面を結ぶラインは掘り方の２層上面とほぼ一致する。

また、両小口壁面のほぼ全面と長側壁の上半に朱が残存していたが、本来は長側壁の下部にも塗布されていたものと考えられる。

検出面において確認された控え積の石材は、全周にわたって見られ、特に北側には顕著に認められる。この他、蓋石を据える際に水平に保つために、部分的に粘土を貼り付けている。

石室内からは東頭位の人骨が１体確認されたが、遺物は出土しなかった。

６号墓（第 20 図　図版 13・14）

５号墓の北側約４mで確認され、主軸をＮ－ 50°－Ｗにとり、西に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

墓坑は削平を受けており、平面形は確認することができなかったが、規模については主軸上に設定したトレンチから長軸 2.96 m、短軸 2.49 mであることが確認できた。

蓋石は耕作等により大きく破壊されており、その破片が大量に散乱している状態で検出された。これらは蓋石のみの破片とは考えにくく、壁体に平積みされた板石も含まれているとみられることから、石棺系竪穴式石室と判断した。

石室の規模は床面で、長さは主軸上で 1.96 m、幅は短軸上で 0.72 m、東端で 0.69 m、西端で 0.71 mを測る。このうち、西側小口の基底石が内側に大きく倒れこんでおり、主軸上の長さはその掘り方から判断した。床面には、敷石や石枕等は設けられず、地山を床としている。床面は東側から西側に向かって傾斜しており、東西両端でのレベル差は５～６㎝である。さらに上面での規模は、基底石の幅が短軸上で 0.62 mで、床面の規模と比べると、内傾気味に壁を構築している。

左右長側壁は基底部に安山岩製の３枚の板石を立てて構築しているが、床面からの高さが西側から 0.45 m、0.55 m、0.60 mとなっている。この基底石上部の構造は、東側の基底石上に厚さ約 10 ㎝の板石を平積みしている。他の２枚については、削平を受けているために不明であるが、４・５号墓と同様に数段の石積みがあったものと推測される。

両小口壁は基底石に板石を用いているが、前述のとおり、西側の基底石は内側に倒れこんでいるが、板石の長さと掘り方の深さから、床面からの高さは約 0.65 mと推測される。一方、東側の基底石は床面からの高さが 0.75 mである。以上のことから、基底石上部の構造は長側壁同様に板石を積んでいたと考えられるが、高さが低い西側基底石上部には東側より１段多く板石が平積みされていたとみられる。

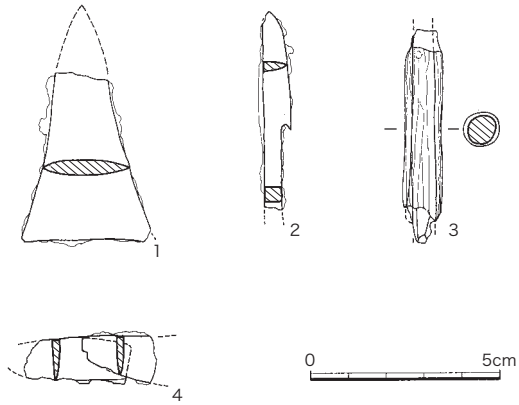
検出面での控え積の状況は西側で確認され、その広がりは４号墓と大きく変わらないことから、本来の石室

規模は４号墓と同規模であったと思われる。

なお、石室壁面には朱の残存や４・５号墓確認された石室上面と蓋石の間の粘土は確認されなかった。遺物は鉄鏃・刀子が出土している。

出土遺物（第 21 図　図版 18）

１は無茎の長三角形鏃で逆刺を有してない。鏃身の先端約 1/3 を欠損している。２は長頸片刃箭式である。関は鋭角をなしている。３は長頸鏃の鏃身部である。全体にわたって樹皮が残存し、下部は箆被がみられる。４は銹着した２本の刀子である。何れも刃部である。



第 21 図　６号墓出土遺物実測図（1/2）

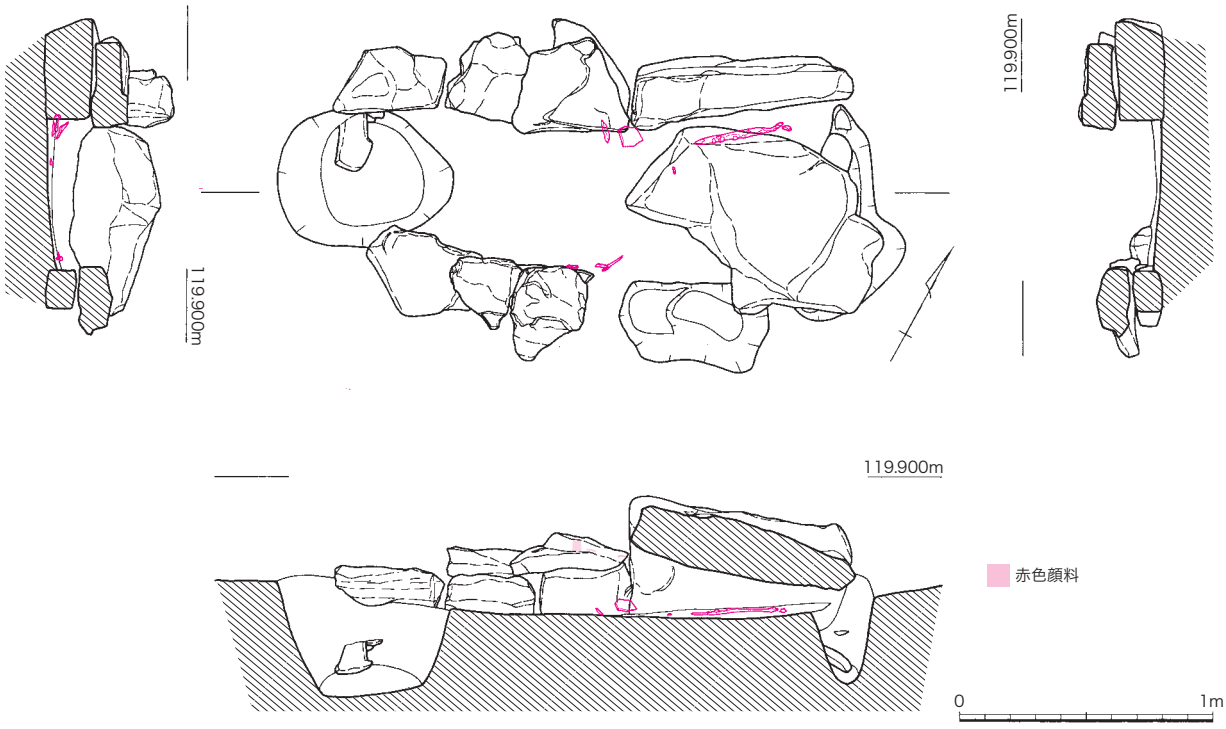
７号墓（第 22 図　図版 14・15）

東側調査区の南西側で確認され、主軸をＮ－ 121°－Ｗにとり、東に頭位を置く石棺系竪穴式石室である。

墓坑は削平を受けており、検出面で確認することができなかった。また、蓋石も残存していなかった。

石室の規模は床面で、長さは主軸上で 1.43 m、幅は短軸上で 0.60 m、東端で 0.70 m、西端で 0.46 mを測る。両小口は東側の基底石が倒れこみ、西側は石材が抜かれており、主軸上の長さはその掘り方から判断した。床面には、敷石や石枕等は設けられず、地山を床としている。床面は中央付近が最も低い、緩やかな舟底上を呈しており、最も高い西端とのレベル差は約６㎝である。

左長側壁は西から３枚、基底部に安山岩製の厚さ 15 ～ 20 ㎝板石を平積みしているのに対し、東側は板石を立てて構築している。右長側壁は左側に比べて、残存状況はよくないが、掘り方の状況から、同様の構築方向を用いていると思われる。また、平積み基底石の上面にはさらに１段の平積みが確認された。２段目の板石の厚さ



第 22 図　７号墓実測図（1/30）

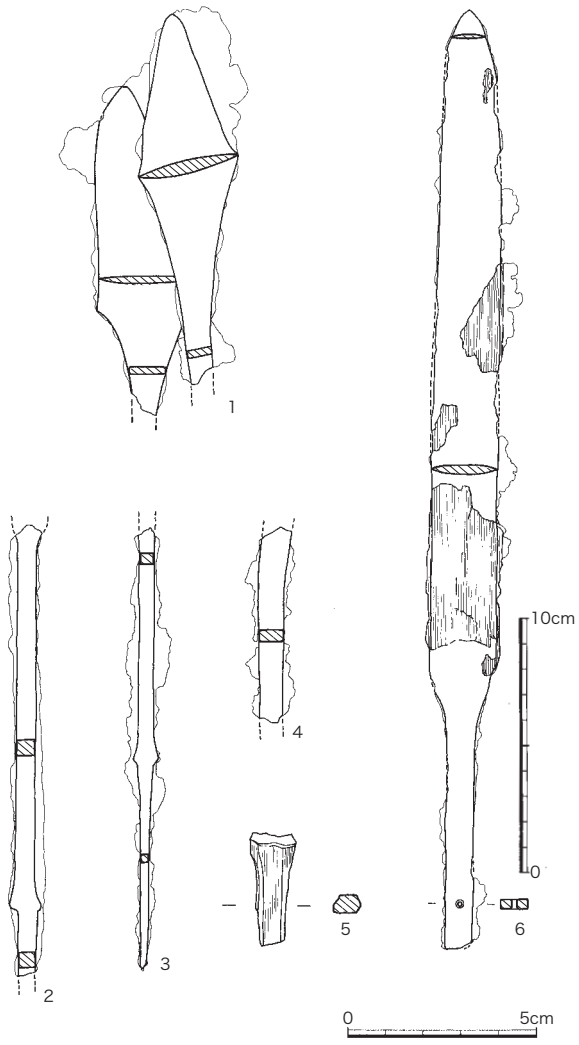
は 10 ㎝程度である。一方、東側の基底石は床面からの高さが 35 ～ 50 ㎝で、東側が低くなっている。これらの壁体の上部構造は不明であるが、他の墓と同様に上部に石積みを行う過程で水平になるように調整し、数段の石積みがあったと思われる。

両小口壁は、東側が内側に倒れこみ、西側は残存していなかった。東側については、板石の長さと掘り方の深さから、床面からの高さは約 0.60 ｍと推測される。このことから、左長側壁は西から３列目までは基底石上に、少なくとも４段の石積みが、東側の基底石上には２～３段の石積みがあったと推測される。

なお、石室壁面には朱の残存は認められなかった。遺物は鉄剣・鉄鏃が出土している。

出土遺物（第 23 図　図版 18）

１は２本の鉄鏃が錆着しており、ともに有茎の圭頭鏃である。下部に錆着する鏃は鋒長が長く、上部の鏃はそれが短い。２～５は長頸鏃である。２・３は柳葉形になると思われ、ともに棘状に突出する篦被をもつ。４は上部の幅がやや広くなっていることから、刃部に近い部分になると思われる。５は木質が全て残っている。篦被部に近い部位のものか。６は鉄剣である。ほぼ完形で把部の一部が欠損する。刃部には部分的に木質の残存が見受けられるが、把部には残存していない。把部には目釘穴が１ヶ所見られる。全長 37.5 ㎝、刃部長 26.3 ㎝、刃部幅は元幅 2.6 ㎝である。また、把部長は 11.2 ㎝、把縁・把頭ともに幅は 1.1 ㎝である。



第 23 図　７号墓出土遺物実測図（1/2、６は 1/3）

写真３　人骨取上げ作業風景

（4）その他の遺物（第 24 ～ 26 図　図版 19・20）

ここでは前述してきた遺構に伴わない遺物や試掘調査で出土した遺物について述べる。

まず、今回の調査では、27 点の縄文土器の出土をみた。それらは後世の溝の埋土中や調査区内において検出されたものであり、土器の示す時期の遺構などから出土したものではない。

以下では、これらのうち図示可能な 26 点を紹介する。

第 24 図 1 ～ 15・17 は早期の所産のものである。

1 ～ 10 は、楕円押型文土器である。いずれも押型文は外面のみに施されており、縦走ないし斜走施文とみられる。また、1・3・10 の楕円文は他のものと比べ、やや大ぶりである。1 は口縁部片である。外反する口縁部内面には原体条痕が施文され、その下は無文である。これら押型文土器は、その文様施文のあり方などから、下菅生 B 式土器から田村式土器の幅の中で捉えられよう。

11 ～ 13 は、撚糸文土器である。撚糸文はいずれも外面のみに施されており、その施文方向は縦位ないし斜位とみられる。なお、13 のみは網目の撚糸文である。

14 は、押型文と撚糸文が併用されているものである。文様は外面のみにみられ、やや大ぶりの楕円押型文ののち網目の撚糸文が施されている。

15 の外面は、最終工程のナデ調整により前工程の施文等が不明瞭であるが、その下半部（とみられる）辺りに楕円とみられる押型文、その上端辺りに撚糸文と思われる痕跡を窺うことが出来る。

16 は、やや外反気味に外傾する口縁部片である。口縁外面には 4 条の横走沈線がみられる。口唇部は剥落等傷付きが多いものの、面取り気味に丁寧に整形されていたものと看取され、その外面端部には刻目が施されていたとみられる。

17 の外面には、撚糸文とその後に施された 3 条の沈線がみられる。最終の器面調整は、内外面とも「ミガキ」と看取されるほど丁寧なものである。

18 の外面は撚糸文と沈線文により文様施文が行われている。小破片であるため文様展開等を窺うことは困難である。

19 の外面には刺突連点文がみられる。小破片であるため詳細は不明瞭であるが、2 列の連点文を一単位として施文していたものと看取される。

17 は、その文様から早期末の塞ノ神Ａａ式土器とみられる。

16・18・19 は、その文様などから 17 と同様ないし近い時期のものであろうか。

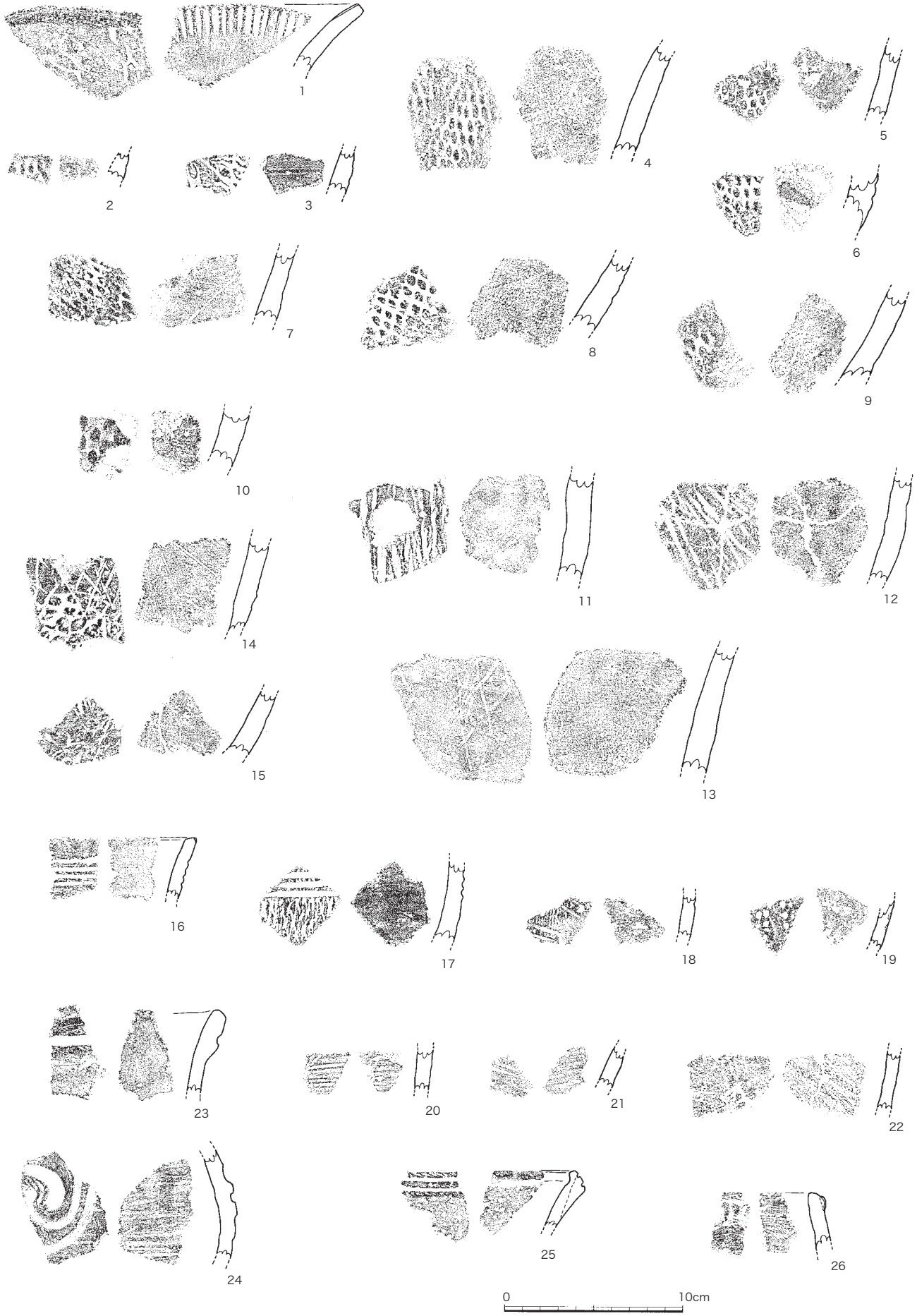
20 ～ 22 は無文のものである。

20・21 の器面には前工程の調整による条痕が窺える。22 の内面はケズリ状となっているが、ナデによるものであろう。

23・24 は、後期中葉の磨消縄文土器である。23 は、口縁部片である。肥厚させた口縁外面には一条の沈線を横走させ、その沈線下に縄文を施している。24 は、胴部上半部のものであり、入り組み文の入り組み部分を窺うことが出来る。23・24 ともに、その器形や文様構成などから小池原上層式土器とみられるが、口唇部内面の段を有していないことや縄文の縄の目が 1 段であること、器面調整の稚拙さなどの属性から、純粋なものではないことが窺える。

25 は、「くの字」状に屈曲させた磨消縄文系の三万田式土器の口縁部片である。口縁部文様帯には 2 本沈線を横走させ、その上部・下部に縄文が施されている。後期後葉の所産である。

26 は、晩期の刻目突帯文土器の口縁部片である。やや内傾気味になるとみられる口縁の外面に刻目突帯が 1 条みられる。



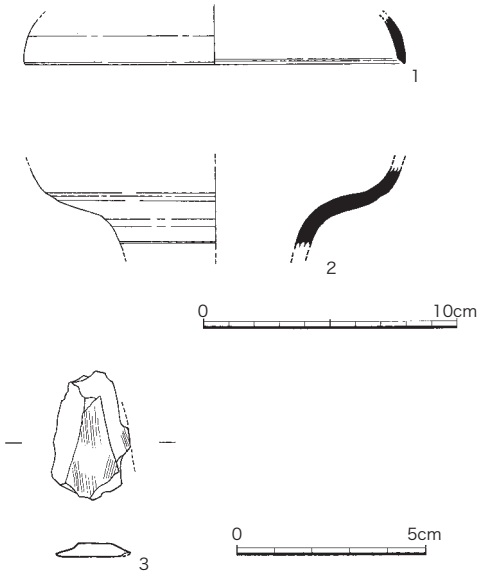
第 24 図　その他の出土遺物実測図（1）(1/3)

次に石器類は、原石や剥片などが31点が出土した。このうち、実測可能なものについては、図化を行い、それ以外は一覧表に記した（第３表)。第25図１は腰岳系黒曜石製の剥片石器である。側縁部に丁寧な加工が施される。２は打面調整剥片である。側縁部と下部の片面から加工が施されている。３・４はスクレイパーである。３は姫島産黒曜石製、４は珪質岩製である。５は石核で、腰岳系黒曜石製である。

第25図　その他の出土遺物実測図（２）(2/3)

須恵器で実測可能なものは２点あった。第 26 図１は坏蓋である。灰褐色を呈し、外面には回転ヘラケズリ、回転ナデ、内面には回転ナデを施す。口縁先端部には段が見られる。復元口径は 15.2 ㎝と比較的大型である。２は𤭯の口縁部か？。灰黒色を呈し、外面には回転ヘラケズリ、回転ナデ、内面には回転ナデを施す。外面には一部自然釉が付着する。

３は試掘調査中に出土した頁岩製の石剣で、切先に近い部分が残存している。残存長 3.4 ㎝、幅 2.0 ㎝、厚さ 0.4 ㎝、重さ 1.6g である。表面には研磨痕がみられる。溝と同時期のものか。



第 26 図　その他の出土遺物実測図（３）
（1/3・３は 2/3）

写真４　調査区埋め戻し作業風景

Ⅳ 大分県日田市長者原遺跡の出土人骨

邱鴻霖*・岩下芙沙*・渡部芳久*・舟橋京子**・田中良之***
*九州大学比較社会文化学府基層構造講座
**九州大学人文科学研究院
***九州大学比較社会文化研究院

1．はじめに

2000 年 7 月、日田市長者原遺跡から古墳時代の石室墓が発見され、人骨数体が出土した。調査にあたった日田市教育委員会より九州大学比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、田中・舟橋（博士院生）および岡崎健治・森口信哉（修士院生）が現地に赴き、現地調査と取り上げを行った。人骨はその後本講座に搬入され、整理・分析が行われた。以下に、その結果を記載する。

2．2 号墓出土人骨

【出土状態】

墓室内は攪乱されていたため、埋葬姿勢等の状態は不明である。

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は後頭骨外後頭隆起部分の小破片が遺存するのみである。下顎骨は、左オトガイ孔から第 1 小臼歯～第 1 第臼歯歯槽部の破片、右第 1・2 大臼歯歯槽部の破片、および右下顎角近くの破片が遺存している。ほかに、部位同定が困難な小片が少量遺存している。

上肢骨は、上腕骨体部遠位とみられる小片が遺存しているのみである。

下肢骨は、右大腿骨骨体部近位の破片が遺存しているのみで、厚手であるが粗線の発達は弱い。

残存歯牙の歯式は以下の通りである。

	●				●											
／	M^2	／	／	／	C	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
／	M_2	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	P_1	△	／	／	／
	●											●				
	c															

（○歯槽開放、×歯槽閉鎖、/ 欠損、Δ歯根のみ、・遊離歯、() 未萌出、C 齲歯）

そのほか、歯根を欠損する左右不明の下顎第２小臼歯、上顎の中・側切歯とみられる小片、歯根を欠損する下顎大臼歯の破片２点が遺存しており、このほかにも小片が遺存している。

歯牙咬耗度は栃原（栃原 1975）の 2° a ～ 3° である。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度から熟年と推定される。性別については、粗線の発達が弱いものの、他に性判定に有効な部位が残存していないため、判定は困難である。

３．４号墓出土人骨

【出土状態】

本石室からは人骨が３体出土している。石室内には若干土砂が堆積していたが、その堆積は２時期に分かれる。すなわち、床面から６～７㎝の厚さで堆積した土は安定した体積状態であるのに対して、その上に薄く堆積していた土は粘性を帯びていた。さらに、石室内西側から東側にむけて傾斜した状態で近代（現代？） 以降に流入したと考えられる土砂が堆積した。出土人骨は殆どが粘質土層以下のレベルから出土しており、一部のみが近・現代の流入土中からも出土している状態であるため、床面直上の土が埋葬後に天井部から落下して堆積した土と考えられる。

さて、本来の埋土中から出土した人骨は、以下のような出土状態であった。まず、石室内南側の床面直上から、頭位を北東にとった仰臥伸展葬で１体が出土しており、これを１号人骨とする。１号人骨の北西側からは頭蓋骨・躯幹骨・四肢骨が出土しており、これを２号人骨とする。２号人骨の足下側の石室内西隅付近から頭蓋骨が出土しており、これを３号人骨とする。

１号人骨の左上肢は，上腕骨の外側を上にし、橈骨の上から尺骨が出土していることから、手を回内した状態と考えられる。また、左肩関節は外れており、左鎖骨が長軸を北東－南西方向にした状態で出土している。加えて，左肩甲骨は下顎西側の胸椎直上から出土している。右上肢は肋骨の右側に接した状態で出土している。椎骨は、ほぼ解剖学的正位置を保っているものの、第１腰椎と第２腰椎の間でやや屈曲している。下肢骨も解剖学的正位置を保っている。膝関節部分が遺存していないが、この部分が蓋石の割れ目に相当するためと考えられる。

２号人骨は、石室内北側から頭蓋骨･歯牙･下顎･肋骨が出土している。最も北東側から頭蓋骨が出土しており，その南西から下顎骨がオトガイを南西に向けた状態で出土している。歯牙は下顎骨付近からまとまった状態で出土している。下顎の南東側に近接して左肩甲骨が位置し，その南西側から肋骨及び上肢が出土している。左右の上肢は長軸を北東－南西に揃えた状態である。石棺中央北側からは、大腿骨が近位を北東にし長軸を北東－南西に揃えた状態で出土している。

３号人骨は、石室内北西側の２号人骨の足下付近から頭蓋骨･歯牙･下顎片等がまとまった状態で出土している。これ以外にも石室内の西側 1/4 の範囲から３号人骨の遊離した歯牙が４点出土している。

一方で、近現代以降に流入したと考えられる土砂中にも若干人骨が含まれていた。すなわち、石室内中央付近の１号人骨の骨盤から左大腿骨の上部にかけて、１号人骨の右上顎・右眼窩・前頭骨・左寛骨・左大転子及び３号人骨の左頭頂骨片・歯牙１点と２号人骨の椎骨が出土した。

以上３体の人骨の出土状態から、歯牙が石室内西側 1/4 の範囲に散在していることから、本来西側に頭位を取って埋葬されていた３号人骨が、２号追葬の際北西壁側に片づけられたと推定される。加えて、歯牙が歯槽から遊離していることから、３号人骨はある程度軟部組織の普及が進んだ段階で片づけられたと考えられる。さらに、２号人骨は、ほぼ解剖学的正位置を保った状態で出土しているものの、下顎骨と左肩甲骨が近接して出土しており、左右大腿骨の間隔も狭いことから、それほど軟部組織の普及が進んでいない段階で１号追葬のために西北壁側へ寄せられたと考えられる。さらに、１号人骨の肩関節が外れており、左鎖骨が上腕骨と長軸をほぼ揃えた状態で出土していることから、１号人骨が南東壁と２号人骨の間の狭隘な空間に埋葬されたために、軟部組織の普及後に肩関節が外れたと考えられる。このような１号人骨の埋葬姿勢からも、２号人骨が未だ十分に骨化していなかったため、１号人骨の追葬に十分な空間を用意できなかったと考えられる。

近・現代以降の流入土内から出土した人骨のうち、石室内中央部の１・２号人骨腰部付近の骨は、古い本来の埋土中に位置していたものが撹乱により移動され、石室東隅の１号人骨頭蓋は、古い埋土から露出した頭蓋右

側部分が撹乱により移動されたと考えられる。また、石室内西隅の３号頭蓋骨も、頭蓋冠や付近から出土した歯牙は埋土中にあり、散乱した状態ではないことから、やはり撹乱によって古い埋土から露出しており遊離した部分が石室中央に移動されたと推定される。

以上の出土状態から，３号人骨→２号人骨→１号人骨の順で埋葬されたと考えられる。そして、３号人骨と２号人骨の埋葬間隔は長く，それに対して２号人骨と１号人骨の埋葬間隔は比較的短く 10 数年以内と推定される。

副葬品も出土しており、１号人骨の左上腕骨および左肋骨付近から鉄刀・鹿角製刀装具・鉄族が出土しており、１号人骨の左胸部付近に副葬されていたものと考えられる。また、２号人骨の下顎骨の西側から管玉と青色ガラス小玉１点が出土しており、２号人骨の頸部から胸部付近に副葬もしくは装着されていたと考えられる。

【４号墓１号人骨】

①保存状態

４号墓の石室内では最も保存良好な個体である。頭蓋骨は、右顔面と前頭骨の保存状態が悪い。外後頭隆起と乳様突起は発達しており、頭蓋主縫合は、矢状縫合の外板・内板がともに閉鎖している。

残存歯牙の歯式は以下の通りである。下顎歯槽は歯槽閉鎖部に感染症の所見が認められる。歯牙咬耗度は栃原の１°ｂ～１°ｃであり、下顎の咬耗は左側が右側より強い（栃原 1957)。

	／	M^1	／	／	／	／	／	○	○	○	△	P^1	M^1	○
M_3	M_2	×	○	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	×	M_2

上肢は、左上腕骨の骨頭半分及び、遠位端が遺存してない。左橈骨と左尺骨は骨端部は失われており、骨体のみが遺存する。また、右肩甲骨の外側縁部・関節窩、および左鎖骨・左肩関節の一部が遺存している。

下肢骨の保存状態はおおむね不良である。寛骨は、右腸骨が欠損しており、仙腸関節と恥骨の一部、寛骨臼窩が遺存している。大坐骨切痕角は小さい。大腿骨は、左右とも大転子と骨体の三分の一程度は遺存しているが、遠位部は遺存していない。大腿骨の粗線はやや発達している。脛骨は左右とも骨体遠位部しか遺存しておらず、腓骨は右の骨体遠位部片が認められるのみである。なお、右足根骨と距骨の骨片が認められる。

②性別・年齢

性別は、外後頭隆起と乳様突起は発達しており、大腿骨粗線もやや発達しており、大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。

年齢は、頭蓋主縫合の閉鎖状態、および歯牙咬耗度が１°ｂ～１°ｃであることから、成年後半から熟年と推定される。

③形質的特徴

人骨の保存状態が悪く、可能な部位が遺存していないため、計測的形質については不明である。ただ、いくつかの頭骨小変異は観察可能であった。その結果は表１に示す。

表１．長者原４号墓１号人骨・頭蓋小変異観察

項目	右	左	項目	右	左
舌下神経管二分	/	－	インカ骨	－	
頭頂孔	＋	－	ラムダム縫合小骨	/	－
外耳道骨腫	/	－	頚静脈孔二分	/	＋
ヴェサリウス孔	/	－	卵円孔棘孔交通	/	－
顆前結節	－		副オトガイ孔	－	－
左行矢状洞溝	－				

【４号墓２号人骨】

①保存状態

人骨の保存状態は悪く、頭蓋骨、下顎骨と四肢骨および肋骨破片が確認できるのみである。頭蓋骨は後頭骨と頭蓋底の破片が遺存しており、左右側頭骨の錐体が認められる。他の頭蓋骨は小片で部位の特定ができるものは認められない。右下顎骨体は華奢である。

上肢は左肩甲骨の一部が特定できたのみであり、下肢は左右大腿骨の1/4程度が遺存するにすぎない。また、これらの他に頚椎、腰椎、肋骨、前腕骨の骨片が認められた。

残存歯牙は以下の通りであり、歯牙咬耗度は栃原の１°ａ～１°ｂである（栃原 1957）。

							●			●	●	●	
／	／	／	／	／	／	／	I^1	／	／	P^1	P^2	M1	／
M_2	M_1	×	P_1	C	／	／	／	／	／	／	P_2	／	／
			●	●							●		

②性別・年齢

性別は、人骨の保存状態が悪く、性判定に必要な部位が保存されていないため、不明である。

年齢は、歯牙咬耗度から成年中頃と推定される。

③形質的特徴

人骨の保存状態が悪く、計測・観察部位が遺存していないため、不明である。

【４号墓３号人骨】

①保存状態

人骨の保存状態は悪く、頭蓋骨の一部と遊離歯牙が遺存するのみである。左頭頂骨の一部や左右錐体が認められ、矢状縫合は一部開放している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。歯牙は萌出過程にあり、咬耗度は栃原の０°～１°ａである（栃原 1957）。

		●	●				●	●				●	●
／	／	P^1	P^2	／	／	／	I^1	I^2	／	／	／	M^1	M^2
／	M_1	／	／	／	／	／	／	／	C	P_1	P_2	M_1	M_2
	●								●	●	●	●	●

②性別・年齢

性別は、人骨の保存状態が悪く、性判定に必要な部位が遺存していないため、不明である。

年齢は歯牙の萌出状態と咬耗度から、若年早期と推定される。

③形質的特徴

人骨の保存状態が悪く、計測点や頭蓋小変異を観察できる部位が遺存してないため不明である。ただし、歯の非計測小変異は上顎の左切歯に Double-Shovelling が認められ、Tuner らの３～４度である（Turner 他 1991）。

４．５号墓出土人骨

①出土状態

方形の石室内のほぼ中央部から頭蓋骨・躯幹骨・上肢骨・下肢骨が出土している。頭蓋骨と下顎骨は関節しておらず、頭蓋の下、北寄りに環椎と軸椎がある。また、下顎骨の下には頸椎３個が関節した状況で出土し、その遠位には胸椎２つが位置しているが、それ以外の椎骨・肋骨は関節状態にない。また、頸椎のあたり全面に小動物の骨が混入しているのが確認できる。

鎖骨は左右２本あるが、肩甲骨はその破片が右のみ残存する。右上肢はなく、左上肢は近位に前腕、遠位に前腕が並ぶ。左右寛骨は確認できるが、左は北側に大坐骨切痕が確認できるのみ、右寛骨は右大腿骨頭と関節した状態であるが左右ともに全体形は不明瞭である。左大腿骨はなく、北壁沿いに右脛骨、その南に向かって腓骨２本がある。

頭蓋骨と下顎骨は関節していないが、頸椎の位置が埋葬時に比較的近いと考えると、下顎はそのままで頭蓋が南にふれたと推測できる。肋骨の下、あるいは頭蓋の西側付近に確認できる上顎の遊離歯は、その動きに伴い脱落したものだろう。ちなみに下顎骨は目立った欠損もなく、歯の脱落も見られない。頭蓋骨が多少南にふれ、椎骨・肋骨も原位置から動きはしているが、上腕・前腕・寛骨・下肢骨はほぼ本来の位置を保っていると考えると、下顎の位置から考えて、東に頭位をとった伸展葬であり、おそらくは埋葬後の人為的な攪乱は受けていないものと考えられる。

②保存状態

頭蓋骨の保存状態は比較的良好であるが、右前頭骨の一部、右頬骨弓、左眼窩下孔から上顎にかけて、左右乳様突起、左側頭骨の一部、頭蓋底の後頭顆以後に破損が見られる。頭蓋主縫合は、内板・外板ともに開放する。前頭部に赤色顔料の付着が認められた。下顎骨は左下顎頭・下顎角に多少破損が見られるもののほぼ完存する。

残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

				●	●	●	●								
(M^3)	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	(M^3)
	M_2	M_1	P_2	P_1	m_1	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	

なお、下顎右側をレントゲンで確認したが、犬歯の埋伏は見られなかった。第１・２小臼歯間に空隙があり、近心側歯根が１センチ程度残っていた第１乳臼歯が歯列に残存していた可能性が高い。また、歯槽表面に第１乳臼歯の齲歯による炎症とみられる多孔質が確認された。

躯幹骨・四肢骨の保存状態は不良である。躯幹骨は左右上部肋骨が遺存している。椎骨は、環椎・軸椎とそれ以下の頚椎片が数点と上部胸椎が１個、腰椎が１個、その他部位不明の椎骨片が遺存している。

上肢骨・下肢骨については、左右鎖骨と右肩甲骨の烏口突起と肩峰の付け根付近の破片、出土状況から部位を推定できるのみで、観察不可能な小片が遺存している。

③年齢・性別

第２大臼歯が萌出済みで、上顎の左右第３大臼歯は歯槽内にあることから、年齢は小児期の終わりから若年期の初め（12-13 歳）と推定される。性別は未成年のため不明である。

④特記事項

年齢の割に骨格が小さく、また眼窩上縁にクリブラ・オルビタリア、右前頭部と右側頭骨のラムダ縫合上部にも多孔性過骨形成が確認できることなどから、貧血状態にあったと推定される。また、頭骨小変異としては、右頬骨弓に頬骨後裂が認められた。本例は、頬骨後裂が頬骨を完全に二分している例であり (Ossenberg1970), 頬骨上顎縫合は頬骨側に、頬骨側頭縫合は顔面側にそれぞれＶ字に湾曲しており、またその頂点同士を結ぶ縫合によって完全に頬骨が二分されている。

５．おわりに

以上のように、長者原遺跡からは、３基の石室から５体の人骨が検出された。人骨の保存は必ずしも良くなく、形質的特徴や被葬者の親族関係を明らかにするにはいたらなかった。しかし、本例が古墳時代の日田地域における葬送墓制研究の重要な資料となることは疑いなく、今後の資料の増加を待って再論を記したいと考える。

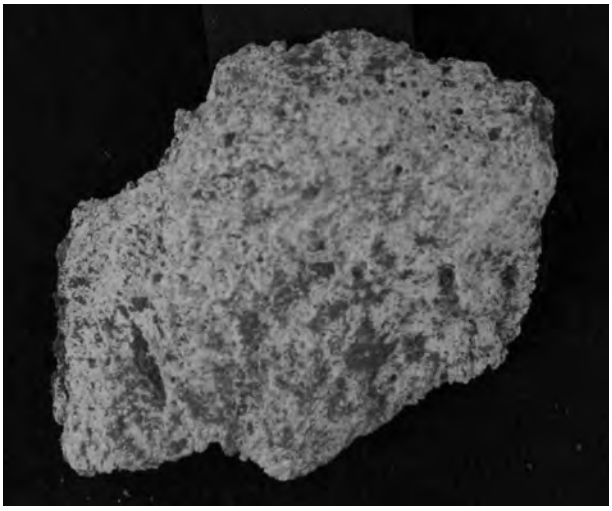
末筆ながら、本例の分析の機会を与えていただいた日田市教育委員会各位に感謝の意を表したい。

参考文献

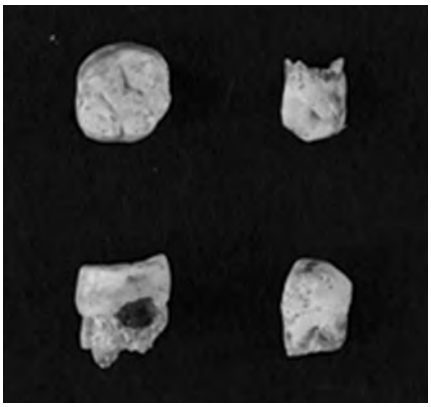
栃原博　1957　日本人歯牙の咬耗に関する研究。熊本医学研究 , 31. 補冊 4。

Turner Ⅱ ,C.G., Nichol, C. R. & Scott, G. R. 1991　Scoring procedures for key morphological traits of the permanent dentition: the Arizona State University Dental Anthropology System.

Ossenberg,N.S., 1970 The influence of artificial cranial deformation on discontinous morphological traits. Amer. J. Phys. Anthrop.33.

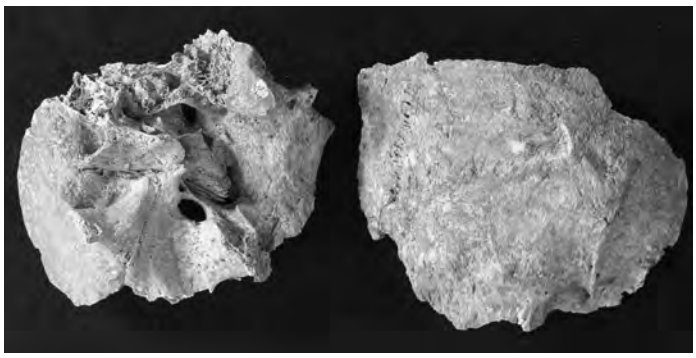


２号墓出土頭蓋骨



２号墓出土歯牙

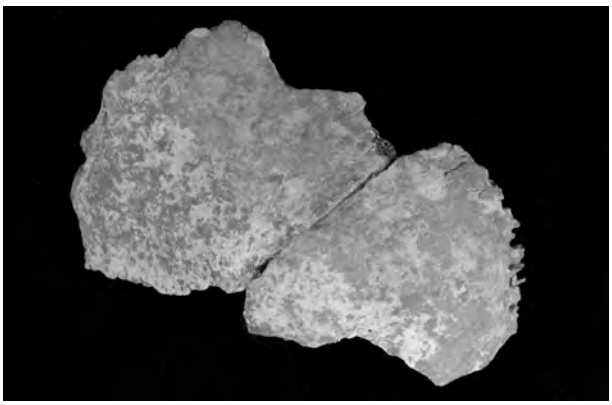
２号墓出土大腿骨



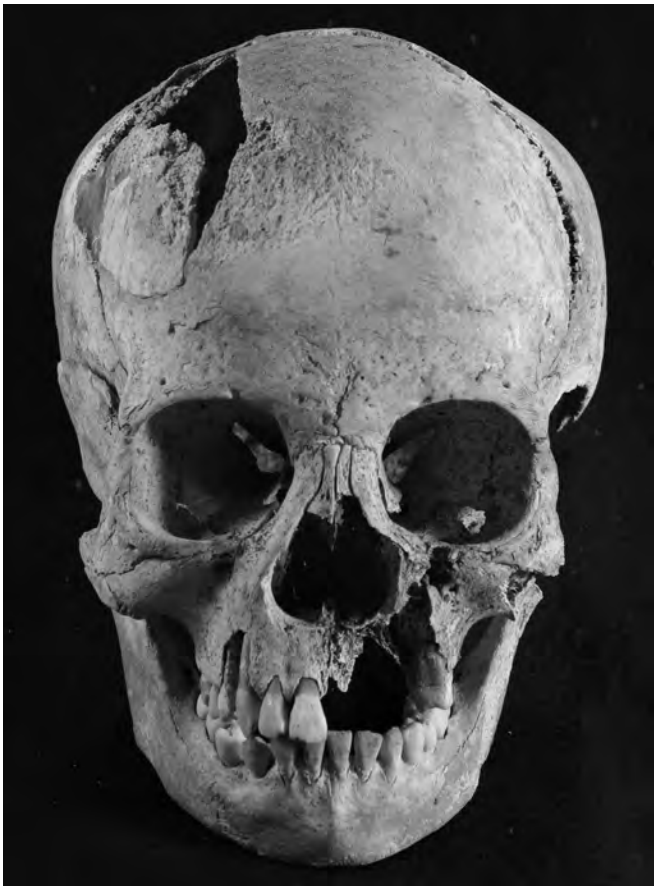
４号墓１号　頭蓋骨

４号墓１号　下顎骨

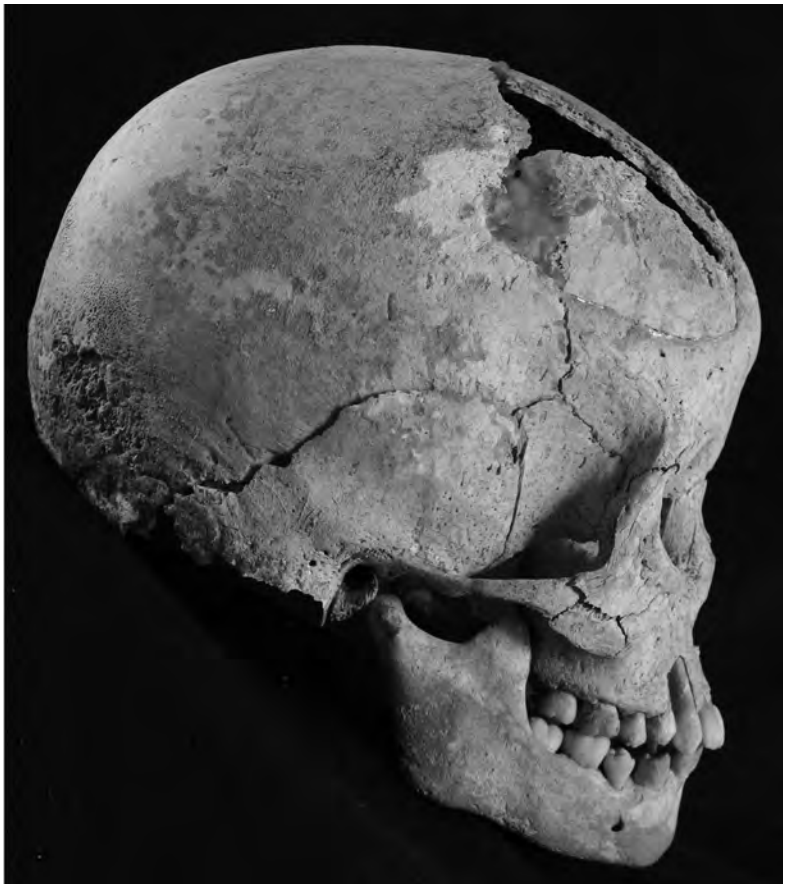
４号墓１号　躯幹骨・上肢骨



1段目　４号墓１号　下肢骨
2段目　４号墓２号　下顎骨・歯牙
3段目　４号墓３号　頭蓋骨
4段目　４号墓３号　歯牙



５号墓出土頭蓋骨（正面観）



５号墓出土頭蓋骨（側面観）

５号墓出土乳歯

５号墓出土下顎骨切歯・小臼歯部レ線像

５号墓出土顎骨切歯・小臼歯部咬合状態

５号墓出土人骨　クリブラ・オルビタリア

５号墓出土人骨　右後頭部多孔性過骨形成

５号墓出土人骨　頬骨後裂

Ⅴ まとめ

今回の調査で確認された主な遺構は、溝と石棺系竪穴式石室・石棺墓である。最後にまとめとして、それぞれの遺構の時期と周辺遺跡との関係やその位置付けについて、考えていくこととする。

溝について

まず、溝の時期であるが、比較的土器がまとまって出土した、２号溝からみていく。２号溝の最下層からは複合口縁壺が出土している。この壺は、口縁屈曲部の稜が明確な点や口縁部の傾きなどから弥生時代後期中頃から後半に位置付けられる。その他、器台は屈曲部が中位よりやや上部に位置している点などからも同時期と考えられる。

次に、２号溝に切られる１号溝の時期であるが、この溝の時期を限定するには、遺物量が少ないが、平底を呈する甕の底部から後期前半頃のものと考えられる。

３号溝からは土師器甕が出土している。この甕は、口縁部が丸みを帯びて外反し、頸部の稜が不明瞭な点から６世紀前半から中頃ものと考えられる。ただ、この溝は３次調査で確認された中世以降の溝と繋がる可能性がある(1)。ただし、中世期の遺物が出土していないことから断定はできない。このため、この溝に関しては時期比定が難しい。

以上、溝の時期についてみてきたが、ここで溝に伴う集落との関係を考えてみたい。これまでの長者原遺跡の調査では、１次調査において、３軒の竪穴住居跡が確認されており、出土遺物から弥生時代後期前半頃に比定されている(2)。この住居は１次調査のⅢ区で確認されたが、この地点は今回の調査区の東側に位置している。また、１次調査のⅠ区・Ⅱ区は４次調査区の南側に位置しているが、住居等は確認されていない。こうした周辺の状況から、今回確認された溝は集落の西側を南北に縦断する部分にあたり、東西約 70 mに亘って崖面との間に住居が存在していた環濠集落と思われる。一方、南北方向については、これまでの調査で１・２号溝と思われる遺構は確認されてないことから、その規模や形態については、今回の調査結果からは言及できない。

次に日田市内に存在する他の環濠集落との比較を行ってみたい。現在のところ、市内での環濠集落は小迫辻原遺跡・吹上遺跡・三和教田遺跡・平島遺跡・徳瀬遺跡・大肥遺跡・惣田遺跡・中川原遺跡(3)において確認されている。このうち、後期の環濠集落は小迫辻原遺跡・吹上遺跡を除いて、いずれも沖積地上に立地している。環濠集落に限らず、市内では後期に入り、集落の多くが台地上から沖積地へ移動するのが一般的な傾向として指摘されている(4)。しかし、長者原遺跡ではこの傾向とは異なり、台地上に環濠集落が形成されている。これは、台地北側にある沖積地が狭く、適当な場所が存在しなかったためと思われる。

墓について

今回確認された７基の墓のうち、４～７号墓はいわゆる「石棺系竪穴式石室」に分類される。この種の石室については、過去に中間研志が型式分類を行っている(5)。そこで、この分類に従って、各墓についてみていくこととする。

まず、４号墓は「両小口の基底石が板石を立てたもので、その上に平積みをし、両側壁は最基底から平積みをしたタイプ」であるＡ２類にあたる。５・６号墓については、「両小口及び両長側壁の基底部分が板石の立石」となるもので、Ｂ１類に分類される。７号墓は、「Ａ２類のうち、長側壁の一部が立つもの」、つまり板石の立石と小口積みが混在するタイプとされていることから、Ａ３類とすることができる。

次にこれらの時期変遷についてであるが、中間氏の年代観に当てはめると、Ａ２類の４号墓は４世紀末から

５世紀前半、Ａ３類の７号墓は５世紀前半となる。ともに鉄剣を副葬している点からも古い要素を見出すことができる。次にＢ１類の５、６号墓は５世紀前半から中頃としている。これにより、４号墓→７号墓→５号墓・６号墓の変遷がみてとれる。

続いて、出土遺物から年代をみていく。２号墓では長頸柳葉式の鉄鏃が纏まって出土した。これらの鉄鏃は刃部の形態や箆被の位置から５世紀後半のものといえる[(6)]。

次に７号墓出土の片刃箭式鉄鏃の鏃身断面は平刃造であるが、この型式では両刃造りのものが６世紀前半に出現することから[(7)]、少なくとも下限はこの時期以前、５世紀末～６世紀初頭に求められる。さらに７号墓からは鉄鏃の頸部が出土しているが、箆被より下部の長さが同様の鉄鏃が４号墓でも確認されており、ほぼ同時期のものと考えられる。さらに４号墓では、７号墓と同様に鉄剣が出土しており、副葬品のセットからみてもこの２つの墓の下限は同時期として考えていいだろう。

また、４号墓から出土した３体の人骨は、３号→２号→１号の順で埋葬されたと考えられているが、１号人骨の左胸付近から出土した鉄剣・鉄鏃や鹿角製剣装具は５世紀末～６世紀初頭のものと見られ、この時期が最終埋葬の時期と考えられる。また、２号人骨付近からは、碧玉製管玉とガラス製小玉が出土している。このうち、ガラス製の小玉は中期中頃以降、徐々に少なくなり、後期には見られなくなることから[(8)]、２号人骨の下限は５世紀後半とみることができる。さらに追葬された１・２号人骨の埋葬間隔は 10 数年とみられていることから、初葬時の３号人骨と追葬時の２号人骨との埋葬間隔は短くみても 30 ～ 40 年はあったと推定できる。このことから、３号人骨の埋葬時期は２号人骨より 30 ～ 40 年遡って、５世紀前半、第二四半期あたりになるとみていいだろう。

以上、構造による時期変遷と鉄鏃を中心とした出土遺物からの時期をみてきたが、まとめてみると４号墓（初葬時）→２号墓（４号墓１回目追葬）→５～７号墓（４号墓２回目追葬）の順に造営されたと考えられ、５世紀前半から、下っても６世紀初頭に時期に営まれたと想定される。この年代観は、特に石棺系竪穴式石室の構造からみた年代観とは若干ずれることになるが、この点については後ほど考えてみたい。また、３号墓は刀子のみからの時期決定はやや困難であり、さらに１号墓については副葬品が出土しなかったことから、明確な時期はわからない。しかし、頭位方向や他の墓とほぼ同じ間隔で造られている面から、同時期の幅の中に収まるものと考えたい。

次にこの墓群の被葬者像について考える上で、今回の調査で確認された石棺墓と石棺系竪穴式石室をもつ墓群の他の遺跡の事例との比較を行う。まず、市内では天瀬町五馬市の宇土古墳群[(9)]や中尾原遺跡で見られる[(10)]。これらの遺跡で確認された墓群には周溝やマウンドを持っているものが含まれている。これに対し、本遺跡の墓は周溝も確認されておらず、また、各々の墓が２，３m間隔で築かれていることから、大きなマウンドを持っていた可能性も低い。

また、近隣地域の事例として、うきは市・宇土遺跡[(11)]、朝倉市・柿原古墳群[(12)]が挙げられる。宇土遺跡では丘陵上に多くの石棺墓や石棺系竪穴式石室が確認されているが、石棺墓には周溝がないのに対し、石棺系竪穴式石室には周溝が見られ、墓群内での階層の差異がみられる。また、柿原古墳群では、55 基の竪穴式石室・石棺系竪穴式石室が緩斜面に確認されている。ここでは、小規模な墓は４，５m間隔で営まれているが、この種の墓でも周溝が築かれているものが多い。

以上、みてきたてきた遺跡では、同一墓群内に周溝やマウンドをもつ墓があり、首長層と下位層の墓が混在していたとみられる。これに対し、本遺跡の墓は周溝もマウンドも見られないことから、首長層の墓は存在しない可能性が大きい。そのため、４号墓のように４世紀末～５世紀初頭のものと考えられる型式の墓が５世紀前半に造営されているように、最新の墓制を取り入れる首長層とは異なり、旧来の墓の型式を採用したと考えられ

る[13]。

また、３号墓からは刀子が２本出土したのみであるが、この副葬品から被葬者は女性である可能性が高い。

さらに５号墓に埋葬されていた人物は１２～１３歳の女児の可能性があることを考えれば、今回確認された墓群は、女性・子供を含む同族的な関係で結ばれていた集団の墓地である可能性が高いと思われる。

ただし、墓群内では墓の型式からみて、序列が存在することや[14]、剣・玉類を副葬する墓とそうでない墓があることみても、集団内にある程度の身分差は存在したと思われる。

最後に墓の時期と同時期の集落との関係であるが、３号溝から出土した土師器が６世紀前半～中頃にあたる、ことから、周辺に集落が存在していた可能性もある。また今回の調査区の南側約 370 mに位置する２次調査区では、５世紀末～６世紀前半の竪穴住居が１軒確認されており[15]、居住域と墓域の関係を考える上でも興味深い。

以上、今回の調査成果について、まとめてきた。弥生時代の環濠については、一部しか確認されていないことや、環濠の内や外での集落の様相がほとんど判明していないことなど課題は多い。また、古墳時代の墓については、周辺にはまだ多くの墓が存在する可能性が高く、今後の調査次第ではそれらを含めた墓群の性格を検討する必要があるだろう。しかし、今回の調査において、この一帯における弥生時代後期の集落の様相や古墳時代中期から後期にかけての墓制の一端を垣間見ることができた成果は大きいと考えている。

註

(1) 土居和幸「長者原遺跡」同編『平成９年度（1997 年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999
(2) 土居和幸「長者原遺跡」同編『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会　1986
(3) 平成 17・18 年度に調査。環濠から出土した時期の詳細な検討は今後の整理していくため、現時点ではその可能性が高いとしておく。
(4) 土居和幸・田中裕介「最古の居館・小迫辻原遺跡」小田富士雄編『風土記の考古学４　豊後国風土記の巻』 同成社　1995
(5) 中間研志「Ｂ．竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」同編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－６－』甘木市所在柿原古墳群の調査Ⅱ　中巻　福岡県教育委員会　1986
(6) 古野徳久「古墳時代鉄鏃の編年－北部九州を中心として－」『九州考古学』第 64 号　九州考古学会 1989
(7) 飯塚武司「後期古墳出土の鉄鏃について」『研究論集』Ⅴ　財団法人東京都埋蔵文化財センター　1987
(8) 伊藤雅文「５ 装身具Ｃ 玉類」河上邦彦編『古墳時代の研究』８ 古墳Ⅱ 副葬品　雄山閣出版　1991
(9) 渋谷忠章他『宇土遺跡発掘調査報告書』大分県天瀬町教育委員会　1986
(10) 今田秀樹「中尾原・杉ソノ遺跡」『天瀬町誌－明日への礎－』天瀬町 2005
(11) 寺嶋克史編『宇土遺跡第２地点』『宇土遺跡』浮羽町文化財調査報告書　第 15・16 集　浮羽町教育委員会　2000・2002
(12) 中間研志編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－６－』甘木市所在柿原古墳群の調査Ⅱ　中巻　福岡県教育委員会　1986
(13) 重藤輝行・西健一郎「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性―東部の前期・中期古墳を例として―」『日本考古学』 第２号　考古学協会　1995
(14) 註（13）に同じ
(15) 土居和幸「長者原遺跡」同編『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』日田市教育委員会　1987

第１表　出土土器観察表（１）

※法量の（　）は残存部分

挿図番号	図版番号	遺構	種別	器種	法　量 (cm)				調整		胎　土	焼成	色　調		備　考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第６図１	16	１溝	弥生	甕	-	-	6.8	(2.7)	ナデ	指押さえ	ＡＣＨ	やや不良	淡黄褐色	暗褐色	
第６図２	16	１溝	弥生	甕	-	-	(7.4)	(3.9)	ハケ・ナデ	ナデ	ＣＧ	良好	赤褐色	暗褐色	
第８図１	16	２溝	弥生	壺	(14.2)	-	-	(7.6)	ハケ・ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	ＡＣＨ	良好	黄褐色	黄褐色	下層出土
第８図２	16	２溝	弥生	壺	-	-	-	(2.9)	ナデ	ナデ	ＡＢＣＦ	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	二重口縁屈曲部
第８図３	16	２溝	弥生	壺	-	-	-	(11.3)	ハケ・ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	ＡＣＤ	不良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第８図４	16	２溝	弥生	壺	-	-	-	(6.3)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ＡＢＣ	良好	褐色	褐色	
第８図５	16	２溝	弥生	壺	-	-	-	(3.6)	ナデ・ハケ？	ナデ・指押さえ	ＡＢＣＥＦ	良好	暗褐色	暗褐色	
第８図６	16	２溝	弥生	壺	-	-	-	(9.0)	ハケ・ナデ	ナデ	ＡＣＤ	良好	暗褐色	淡黒褐色	
第８図７	16	２溝	弥生	甕	-	-	(7.8)	(5.2)	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	ＡＣＤＦ	不良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第８図８	16	２溝	弥生	壺	-	-	(8.0)	(4.5)	ハケ・ナデ	ハケ	ＡＢＣ	良好	黄褐色	黄褐色	
第８図９	16	２溝	弥生	高坏	-	-	(13.2)	(3.7)	ハケ・ナデ	ハケ	ＡＣＤＦ	良好	黄褐色	黄褐色	
第８図 10	16	２溝	弥生	高坏	-	-	-	(1.7)	？	？	ＡＢＣＤＥ	不良	淡褐色	淡褐色	
第８図 11	16	２溝	弥生	器台	12.2	-	(14.8)	15.7	指押さえ・ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	ＢＣ	良好	赤褐色	赤褐色	
第８図 12	16	２溝	弥生	器台	-	-	-	(11.4)	ハケ・ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	ＡＢＣＤＥ	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第８図 13	16	２溝	弥生	器台	-	-	(13.0)	(9.2)	ナデ・ケズリ・指押さえ	ナデ・ケズリ・指押さえ	ＡＣＥ	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第８図 14	16	２溝	弥生	壺	(10.4)	-	-	(7.7)	？	指押さえ・ナデ	ＢＣ	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第９図１	16	３溝	土師	甕	(18.9)	-	-	(5.4)	ナデ	ナデ・ケズリ	ＡＢＣ	良好	黄茶褐色	黄茶褐色	
第９図２	－	３溝	土師	甕	-	-	-	(5.1)	ナデ	ナデ・ケズリ・指押さえ	ＢＣＧ	良好	黄褐色	黄褐色	
第 26 図１	20	一括	須恵	坏蓋	(15.2)	-	-	(1.8)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	Ｅ	良好	灰褐色	灰褐色	
第 26 図２	20	一括	須恵	𤭯	-	-	-	(3.3)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	ＡＥ	良好	灰黒色	灰黒色	外面釉付着

胎土　Ａ：角閃石　Ｂ：石英　Ｃ：長石　Ｄ：赤色粒子　Ｅ：白色粒子　Ｆ：黒色粒子　Ｇ：雲母　Ｈ：砂粒

第２表　出土土器観察表（２）

挿図番号	写真図版	出土位置等	器面調整		色調		胎土							備考
			外面	内面	外　面	内　面	角閃石	斜長石	石英	雲母	白色粒	赤色粒	黒曜石	
第 24 図１	19	２溝４トレ	楕円押型文→ナデ	原体条痕→ナデ	淡黄褐色	淡茶褐色	○	○			○			
第 24 図２	19	一括	楕円押型文→ナデか	〈　剥　落　〉	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○		○	○		
第 24 図３	19	試掘１２トレ	楕円押型文→ナデ	ナデ	淡赤茶色	黄灰褐色	○	○			○	○		
第 24 図４	19	一括	楕円押型文→ナデ	ナデ	濃黄褐色	黒褐色	○	○	○		○			
第 24 図５	19	２溝？トレ	楕円押型文→ナデ	ナデ	白黄土色	白黄土色	○	○	○		○			
第 24 図６	19	一括	楕円押型文→不明瞭	ナデ	淡褐色	褐色	○	○	○		○	○		
第 24 図７	19	一括	楕円押型文→ナデ	ナデ	淡黄土色	淡灰褐色	○	○			○			
第 24 図８	19	３溝	楕円押型文→ナデ	ナデ	淡黄茶色	黄褐色	○	○			○	○		
第 24 図９	19	１溝２トレ	楕円押型文→不明瞭	不明瞭	白黄土色	淡黄灰色	○	○			○	○		
第 24 図 10	19	一括	楕円押型文→ナデ	ナデ	淡黄土色	淡灰褐色	○	○	○		○			
第 24 図 11	19	一括	撚糸文→ナデ	ナデ	淡褐色	淡黄茶色	○	○			○			
第 24 図 12	19	一括	撚糸文か→ナデか	ナデ	淡黄茶色	淡黄褐色	○	○			○			
第 24 図 13	19	一括	網目撚糸文→工具によるとみられるナデ（工具によるものとみられる圧痕残る）	丁寧なナデ（指押さえによるものとみられる痕跡が窺える）	淡茶褐色	明茶褐色	○	○			○			
第 24 図 14	19	一括	楕円押型文→網目撚糸文→ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡灰褐色	○	○	○		○			
第 24 図 15	19	一括	ナデ（押型文や撚糸文ないし沈線文らしき痕跡が窺える）	ナデ	淡茶色	明黄褐色	○	○	○		○			
第 24 図 16	19	一括	沈線→ナデ　：　口唇部外面端部刻目か	ナデ	黄褐色	黒褐色	○	○						
第 24 図 17	19	一括	撚糸文→沈線→ミガキ	ミガキ	明褐色	淡褐色	○	○			○	○	○	
第 24 図 18	19	一括	撚糸文か→沈線→ナデか	ナデか	淡黄茶色	黄褐色	○	○			○	○		
第 24 図 19	20	一括	刺突連点文→不明瞭	不明瞭	明黒褐色	黄茶色	○	○			○	○	○	
第 24 図 20	20	一括	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	褐色	○	○			○	○		
第 24 図 21	20	一括	条痕→ナデ	条痕→ナデ	淡茶褐色	褐色	○	○	○		○			
第 24 図 22	20	一括	不明瞭	ナデか（ケズリ状となっている）	明茶色	黒褐色	○	○			○	○		
第 24 図 23	20	２溝４トレ	縄文（１段）→沈線→丁寧なナデ	丁寧なナデ	黄土色	明黄褐色	○	○			○	○		
第 24 図 24	20	２溝４トレ	縄文（１段）→沈線→ナデ	（巻貝？）条痕→ヘラ状工具によるナデ	薄黄土色	灰褐色	○	○	○	○	○			
第 24 図 25	20	２溝４トレ	縄文→沈線→ミガキ	ミガキ	淡黄土色	淡黄土色	○	○			○	○		
第 24 図 26	20	一括	条痕→ナデ	条痕→ナデ	淡褐色	淡褐色	○	○			○	○		

第３表　出土石器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置等	器　種	石　材	礫面の有無	長さ（ｃｍ）	幅（ｃｍ）	厚み（ｃｍ）	重さ（ｇ）	備　考
第 25 図 1	20	一括	剥片類	腰岳系黒曜石	有	6.0	4.3	1.3	33.1	
第 25 図 2	20	試－ 3 ﾄﾚ	打面調整剥片	腰岳系黒曜石	有	3.3	2.2	0.5	3.3	使用痕有り
第 25 図 3	20	試－ 6 ﾄﾚ	スクレイパー	姫島産黒曜石		2.7	3.7	1.0	8.6	
第 25 図 4	20	一括	スクレイパー	珪質岩	有	4.7	4.8	1.2	23.8	
第 25 図 5	20	一括	原石	腰岳系黒曜石	―	4.2	2.7	2.7	39.2	
－	－	2 号溝 - 4 ﾄﾚ	剥片類	腰岳系黒曜石	有	2.6	3.5	1.5	9.9	
－	－	一括	剥片類	腰岳系黒曜石	有	3.7	3.9	0.9	7.0	
－	－	一括	剥片類	腰岳系黒曜石	有	2.5	1.5	0.6	2.0	
－	－	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石		2.3	2.1	0.7	1.4	
－	－	一括	剥片類	腰岳系黒曜石		1.9	1.8	0.5	1.4	
－	－	試－ 10 ﾄﾚ	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	有	2.1	1.0	0.5	0.9	
－	－	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石		2.0	1.6	0.3	0.6	
－	－	一括	小礫状	腰岳系黒曜石	―	0.7	1.4	0.5	0.6	
－	－	7 号墓	剥片類	腰岳系黒曜石		1.3	1.7	0.1	0.3	
－	－	一括	剥片類	小国産黒曜石		3.3	2.9	1.3	9.8	
－	－	2 溝 - 2 ﾄﾚ	剥片類	小国産黒曜石	有	1.6	2.2	1.2	4.2	
－	－	一括	剥片類	小国産黒曜石		1.5	2.0	0.6	1.1	
－	－	7 号墓	剥片類	小国産黒曜石		1.0	1.0	0.8	0.7	
－	－	Ｐ 2	剥片類	姫島産黒曜石		1.9	2.7	1.3	3.8	
－	－	2 溝 - 2 ﾄﾚ	剥片類	姫島産黒曜石	有	1.2	1.3	0.6	0.7	
－	－	一括	剥片類	サヌカイト		2.5	2.3	1.2	3.7	
－	－	一括	使用痕剥片か	青灰色角閃安山岩		3.7	1.7	0.6	3.2	
－	－	試－ 5 ﾄﾚ	小礫状	石英	―	2.1	2.9	1.6	9.0	
－	－	一括	剥片類	珪質岩	有	3.3	1.8	0.7	3.5	
－	－	試－ 5 ﾄﾚ	小礫状	石英	―	1.2	2.2	1.0	3.0	
－	－	試－ 5 ﾄﾚ	小礫状	石英	―	1.6	1.9	1.0	2.3	
－	－	試－ 1 ﾄﾚ	剥片類	石英		1.2	1.8	0.7	1.3	良質
－	－	試－ 5 ﾄﾚ	剥片類	石英		1.2	1.7	0.6	1.2	水晶っぽい
－	－	試－ 10 ﾄﾚ	剥片類	玉髄	有	1.3	1.9	0.4	0.9	
－	－	1 トレ－ No.19	二次加工剥片	玉髄か		1.2	1.3	0.6	0.8	
第 6 図 3	16	1 溝－ 1 トレ	打製石斧	片岩	―	11.8	5.6	1.2	112.1	
第 26 図 3	18	試－ 5 トレ	石剣	片岩	―	3.4	2.0	0.4	1.6	

第４表　出土玉類観察表

挿図番号	写真図版	遺構	器種	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (cm)	石材	色調	備考
第 17 図 7	18	4 号墓	小玉	0.4	0.5	0.1	0.1	ガラス	青緑色	
第 17 図 8	18	4 号墓	管玉	1.7	0.8	0.3	1.7	碧玉	濃緑色	

第５表　出土鉄器観察表

※法量の（　）は残存部分

挿図番号	図版番号	遺構名	器種	全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃部幅 (cm)	頭部幅 (cm)	刃部厚 (cm)	頭部厚 (cm)	重さ (g)	備考
第 12 図 1	17	2 号墓	鉄鏃	17.4	2.2	1.1	0.4	0.2	0.4	17.5	長頸柳葉式
第 12 図 2	17	2 号墓	鉄鏃	14.2	2.3	0.9	0.6	0.2	0.5	17.9	長頸柳葉式
第 12 図 3	17	2 号墓	鉄鏃	12.5	2.5	0.8	0.6	0.2	0.4	12.5	長頸片刃箭式
第 12 図 4	17	2 号墓	鉄鏃	(14.1)	(1.9)	1.0	0.5	0.2	0.3	15.9	長頸柳葉式
第 12 図 5	17	2 号墓	鉄鏃	(12.8)	2.4	0.7	0.5	0.1	0.3	15.4	長頸柳葉式
第 12 図 6	17	2 号墓	鉄鏃	(9.7)	2.2	0.8	0.4	0.2	0.3	8.9	長頸柳葉式
第 12 図 7	17	2 号墓	鉄鏃	(8.7)	2.1	1.2	0.8	0.2	0.4	0.6	長頸柳葉式（腸抉）
第 12 図 8	17	2 号墓	鉄鏃	(9.5)	-	-	0.6	-	0.4	10.8	長頸柳葉式？
第 12 図 9	17	2 号墓	鉄鏃	(10.6)	(1.3)	(1.0)	0.6	0.2	0.4	11.1	長頸斧箭式
第 12 図 10	17	2 号墓	鉄鏃	(10.2)	-	-	0.3	0.2	0.3	9.4	長頸柳葉？斧箭？式
第 12 図 11	17	2 号墓	鉄鏃	(7.8)	-	-	0.6	-	0.4 ～ 0.6	9.9	長頸？式
第 12 図 12	17	2 号墓	鉄鏃	(4.3)	-	-	(0.5)	-	0.4	5.2	長頸？式
第 12 図 13	17	2 号墓	鉄鏃	(3.7)	-	-	0.7		0.5	6.7	長頸？式
第 12 図 14	17	2 号墓	鉄鏃	(9.3)	-	-	0.6	-	0.4	5.5	長頸柳葉式？
第 12 図 15	17	2 号墓	鉄鏃	(5.0)	-	-	0.7	-	0.4	7.3	長頸？式
第 12 図 16	17	2 号墓	鉄鏃	(5.2)			0.8		0.6	5.0	長頸？式
第 12 図 17	17	2 号墓	鉄鏃	(5.3)	-	-	0.6	-	0.4	8.6	長頸？式
第 12 図 18	17	2 号墓	鉄鏃	(3.6)	-	-	0.6	-	0.4	3.0	長頸？式
第 12 図 19	17	2 号墓	鉄鏃	(3.5)	-	-	0.7	-	0.5	3.4	長頸？式
第 12 図 20	17	2 号墓	鉄鏃	(3.2)	-	-	0.7	-	0.4	2.1	長頸？式
第 12 図 21	17	2 号墓	鉄鏃	(3.9)	(3.9)	(1.0)	-	0.2	-	1.7	長頸柳葉式
第 12 図 22	17	2 号墓	鉄鏃	(5.0)	2.2	0.9	0.6	0.2	0.3	4.6	長頸柳葉式
第 12 図 23	17	2 号墓	鉄鏃	(5.2)	2.5	1.1	0.6	0.2	0.4	5.7	長頸柳葉式
第 12 図 24	17	2 号墓	鉄鏃	(5.5)	-	-	0.7	-	0.3	7.5	長頸？式
第 12 図 25	17	2 号墓	鉄鏃	(2.3)	-	-	0.6	-	0.5	1.4	長頸？式
第 12 図 26	17	2 号墓	鉄鏃	(5.2)			0.7		0.6	8.0	長頸？式、木質残存
第 12 図 27	17	2 号墓	鉄鏃	(2.1)	-	-	-	-	-	0.9	長頸？式、 木質残存・樹種不明
第 12 図 28	17	2 号墓	鉄鏃	(5.8)	-	-	0.5	-	0.4	8.4	長頸？式、 木質残存・樹種不明
第 12 図 29	17	2 号墓	鉄鏃	(2.1)	-	-	0.5		0.5	0.8	長頸？式、篦被部残存
第 12 図 30	17	2 号墓	刀子	(3.6)	-	-	軸幅 1.5		軸厚 0.4	8.5	木質残存
第 12 図 31	17	2 号墓	大刀	(12.4)	鍔長 (1.9)	鍔幅 3.7	鍔厚 0.7	把長 (10.5)	把幅 (1.9)	43.8	把厚 0.5
第 14 図 1	18	3 号墓	刀子	(12.0)	(8.2)	1.3	軸幅 2.3	0.3	軸厚 (1.2)	25.5	軸長　(3.8)
第 14 図 2	18	3 号墓	刀子	11.5	7.9	1.2	軸幅 1.1	0.2	軸厚 (0.3)	17.7	軸長　3.6
第 17 図 1	18	4 号墓	鉄鏃	(5.7)	(5.7)	2.3	-	0.3	-	13.4	
第 17 図 2	18	4 号墓	鉄鏃	(7.9)	-	-	0.4	-	0.3	6.0	長頸？式、 木質残存・樹種不明 篦被有
第 17 図 3	18	4 号墓	鉄鏃	(5.5)	-	-	0.5	-	0.4	4.6	長頸？式、 木質残存・樹種不明
第 17 図 4	18	4 号墓	鉄剣	(20.9)	(20.9)	2.8	-	0.3	-	106.1	木質残存
第 17 図 5	18	4 号墓	鉄剣	(30.2)	(19.8)	2.1	把幅 1.8	0.5	把厚 0.8	109.6	把長 (10.4) 木質残存、把に鍔付着
第 21 図 1	18	6 号墓	鉄鏃	(4.4)	-	2.3	-	0.4	-	14.3	無頸三角形式
第 21 図 2	18	6 号墓	鉄鏃	(5.2)	3.1	0.6	0.5	0.3	0.4	4.4	長頸片刃箭式
第 21 図 3	18	6 号墓	鉄鏃	(5.6)	-	-	0.8	-	0.7	7.6	木質残存
第 21 図 4	18	6 号墓	刀子	(2.6)	(2.6)	1.1	-	0.2	-	4.7	①
				(1.9)	(1.9)	1.1	-	0.2	-		②
第 23 図 1	18	7 号墓	鉄鏃	(9.7)	4.0	2.7	0.6	0.3	0.2	39.5	①短頸柳葉式
				(8.5)	6.0	2.4	0.9	0.2	0.2		②短頸柳葉式
第 23 図 2	18	7 号墓	鉄鏃	(5.2)	-	-	0.7	-	0.3	4.2	長頸？式
第 23 図 3	18	7 号墓	鉄鏃	(11.9)	(0.5)	-	0.5	-	0.4	15.4	長頸柳葉式
第 23 図 4	18	7 号墓	鉄鏃	(11.6)	-	-	0.2 ～ 0.4	-	0.2 ～ 0.3	8.8	長頸？式
第 23 図 5	18	7 号墓	鉄鏃	(3.1)	-	-	0.7	-	0.5	1.9	長頸？式、 木質残存樹種不明 篦被有
第 23 図 6	18	7 号墓	鉄剣	37.5	26.3	2.7	把幅 1.1	0.4	把厚 0.4	148.2	把長 (11.2) 木質残存、把に鍔付着

溝検出状況（南より）

１トレンチ土層堆積状況

写真図版２

１トレンチ土層堆積状況

３トレンチ土層堆積状況

３トレンチ土層堆積状況

４a トレンチ土層堆積状況

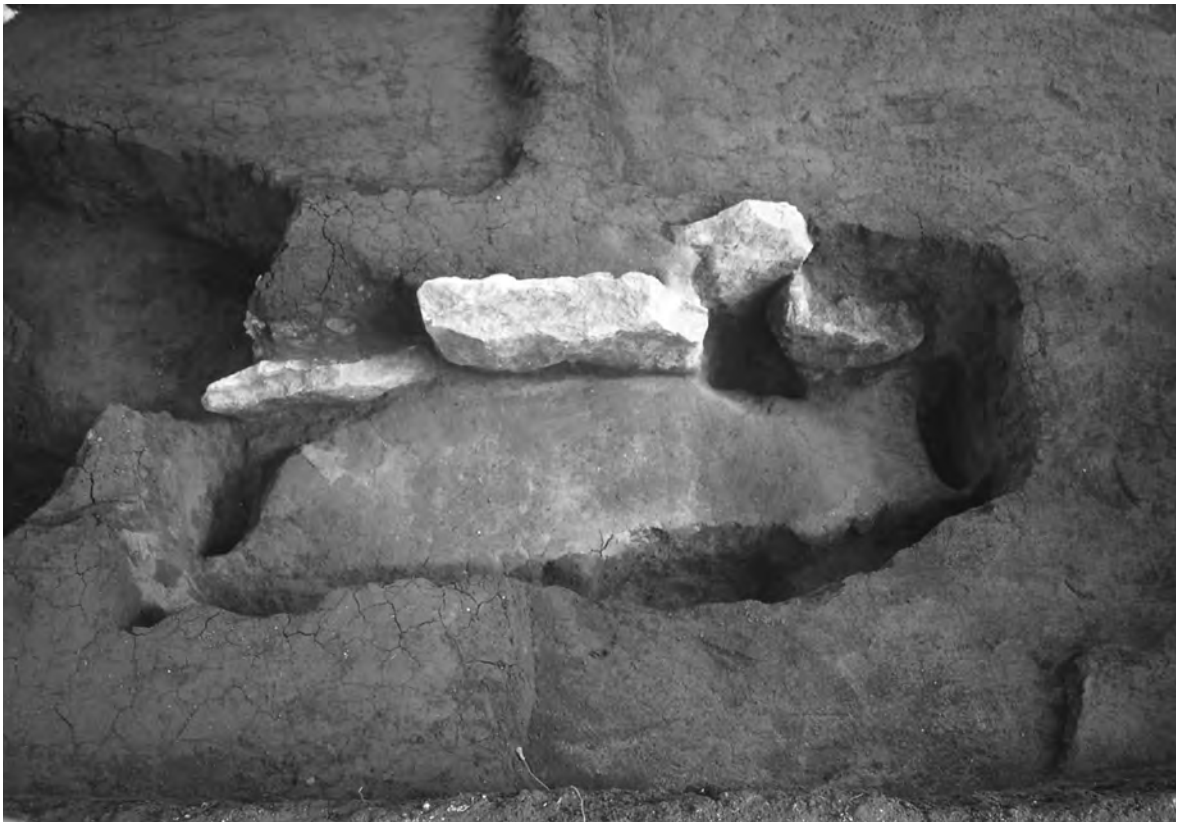
写真図版４

２トレンチ（２号溝）遺物出土状況

３トレンチ（２号溝）遺物出土状況

１号墓検出状況（西より）

２号墓検出状況（北より）

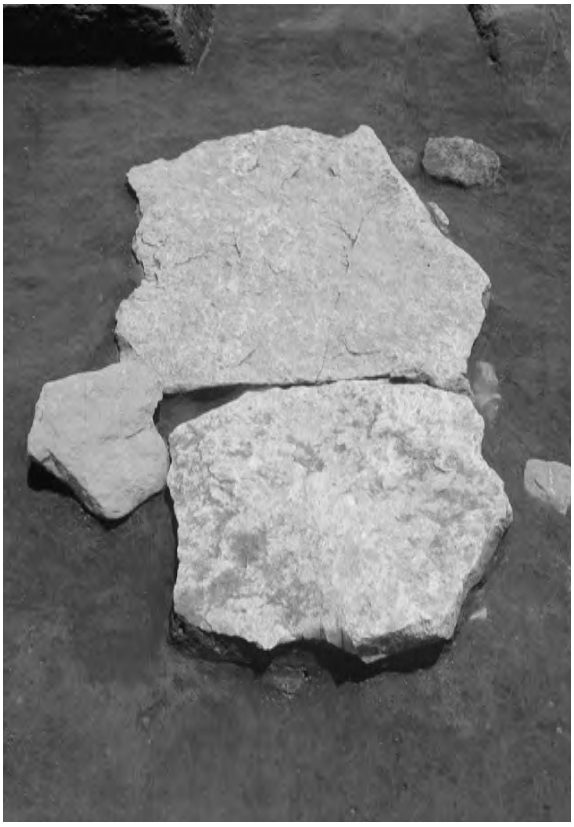


２号墓発掘状況（北より）

２号墓墓坑完掘状況（北より）

２号墓遺物出土状況

３号墓検出状況（西より）



４号墓蓋石検出状況（西より）

４号墓完掘検出状況（西より）

４号墓完掘状況（真上より）

４号墓完掘状況（南より）

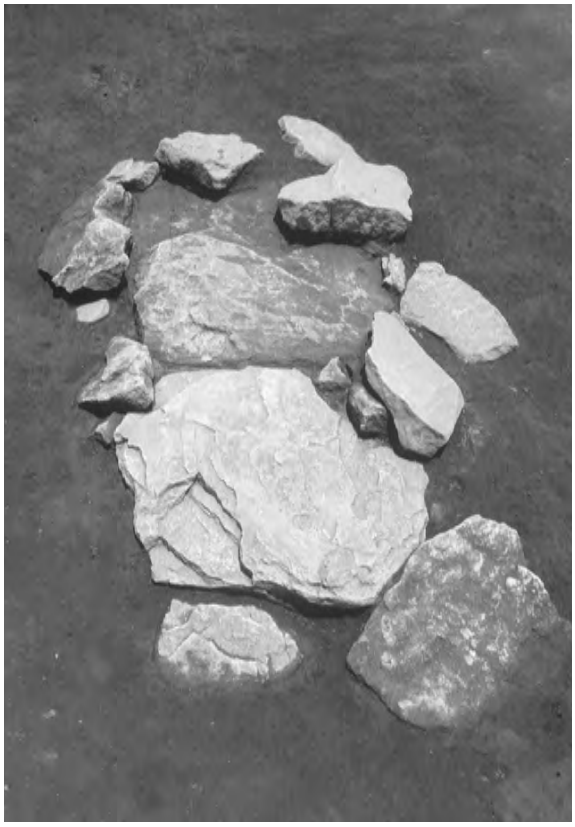
４号墓長側壁石積状況（南より）

写真図版１０

４号墓小口壁石積状況

４号墓人骨出土状況

４号墓遺物出土状況

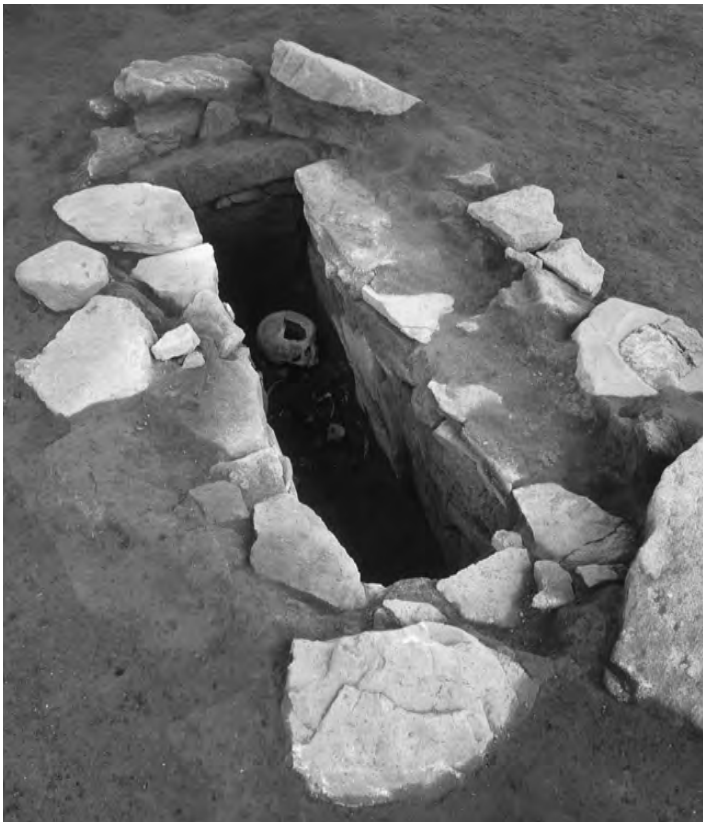


５号墓蓋石検出状況（西より）

５号墓完掘状況（西より）

５号墓完掘状況（真上より）

５号墓完掘状況（北より）



５号墓人骨出土状況（北西より）

６号墓検出状況（北西より）

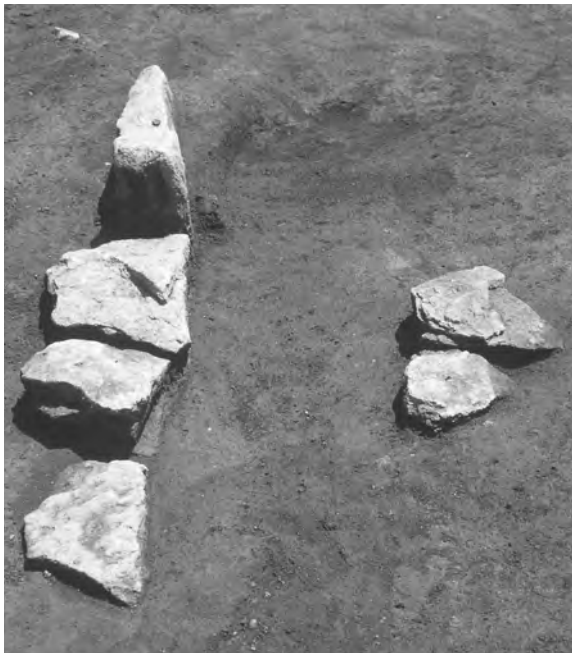
６号墓蓋石除去後状況（北西より）

６号墓完掘状況（北東より）

６号墓完掘状況（北西より）

６号墓蓋完掘状況（真上より）

７号墓検出状況（南東より）



７号墓完掘状況（南東より）

７号墓遺物出土状況

７号墓遺物出土状況

写真図版１６

6-1

6-2

6-3

8-1

8-2

8-3

8-4

8-5

8-6

8-7

8-8

8-9

8-10

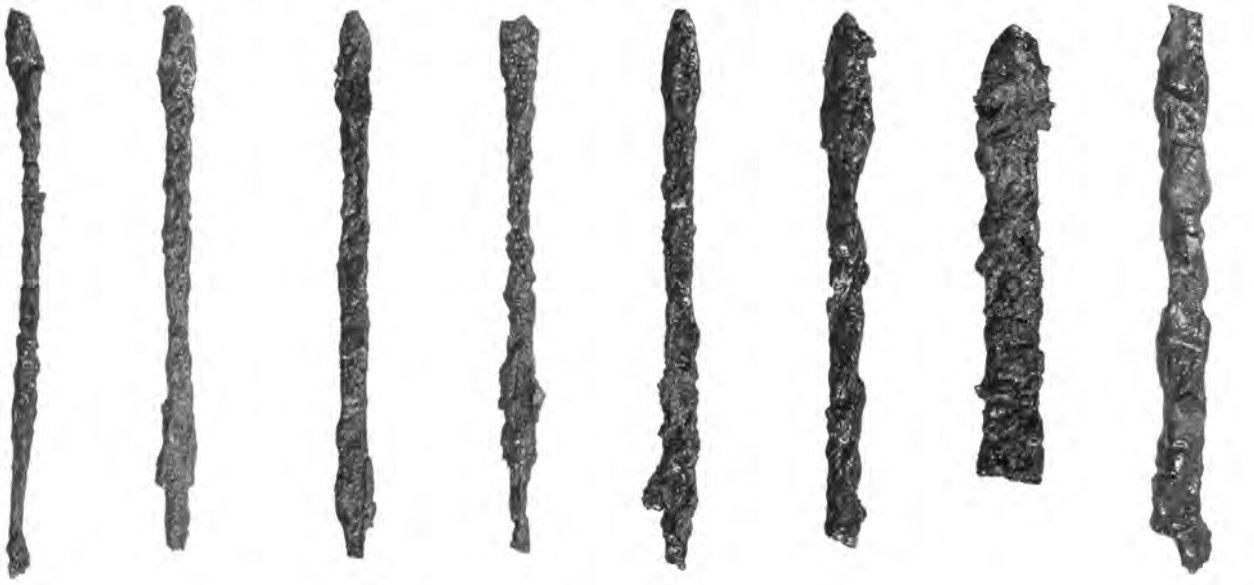
8-11

8-12

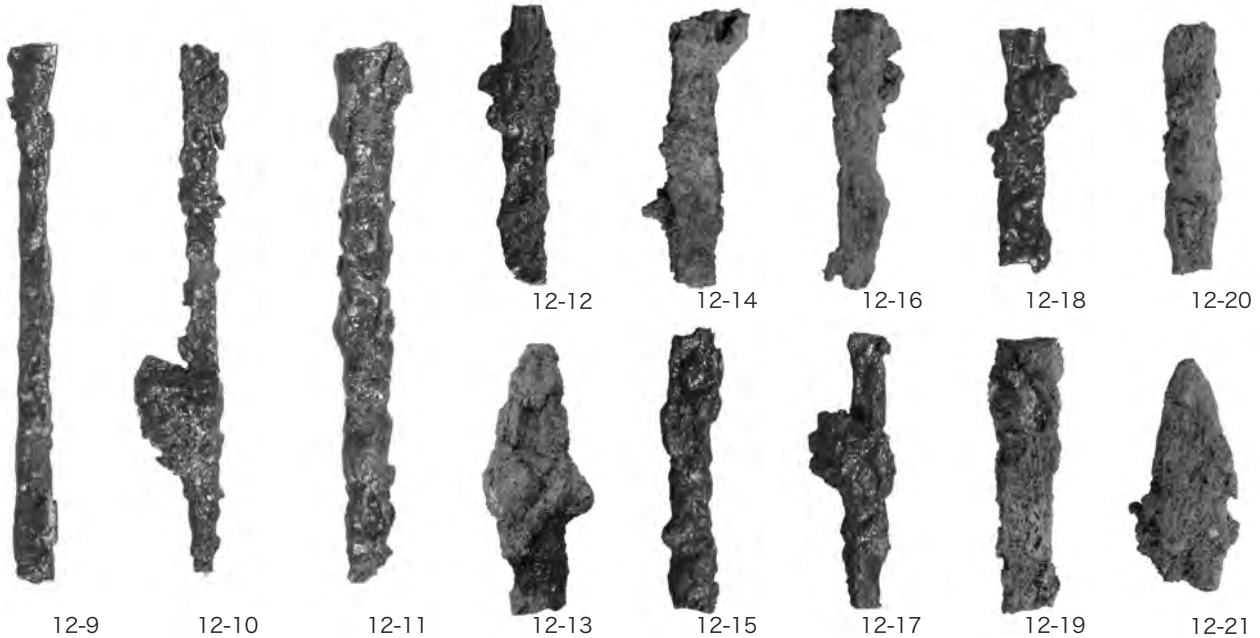
8-13

8-14

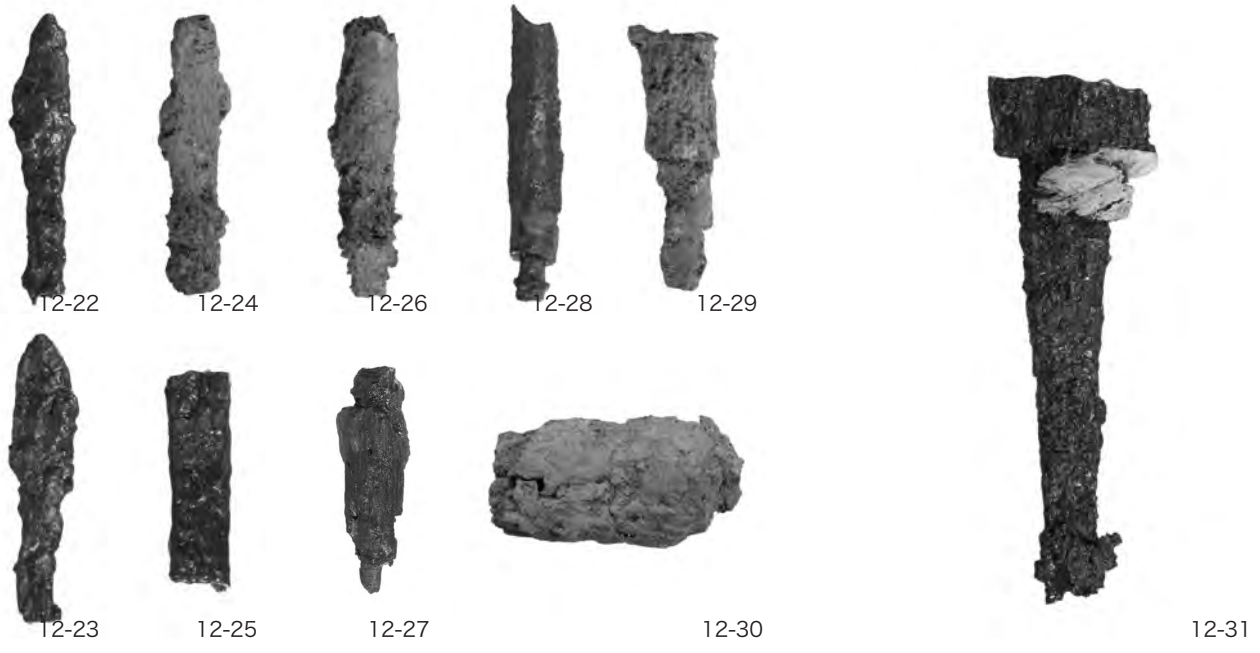
9-1



12-1 12-2 12-3 12-4 12-5 12-6 12-7 12-8



12-9 12-10 12-11 12-12 12-13 12-14 12-15 12-16 12-17 12-18 12-19 12-20 12-21



12-22 12-23 12-24 12-25 12-26 12-27 12-28 12-29 12-30 12-31

写真図版１８

14-1

14-2

17-1

17-4

17-5

17-2

17-3

17-6

17-7

17-8

21-1

21-2

21-3

21-4

23-6

23-1

23-2

23-3

23-4

23-5

24-1(外面)

24-1(内面)

24-2

24-3

24-4

24-5

24-6

24-7

24-8

24-9

24-10

24-11

24-12

24-13

24-14

24-15

24-16

24-17

24-18

24-19

24-20

24-21

24-22

24-23

24-24

24-25

24-26

25-1

25-2

25-3

25-4

25-5

26-1

26-2

26-3

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちょうじゃばるいせき
書　　名	長者原遺跡Ⅱ
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	9／77
編著者名	若杉竜太（編）、田中良之・舟橋京子・今田秀樹
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2007年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長者原遺跡	大分県日田市 大字小山字沖原 195-2 ほか	44204-6	651110	33° 18′ 29″	130° 54′ 24″	20000518 ～2000810	569㎡	個人住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長者原遺跡		縄文	集石・包含層	縄文土器・石器	
	集落	弥生	溝	弥生土器・石器	
	墓地	古墳	石棺系竪穴式石室・石棺墓	鉄器・玉類	

長者原遺跡Ⅱ

2007年3月30日

編　集　877-0077　大分県日田市南友田町516-1
日田市教育委員会文化財保護課

発　行　877-8601　大分県日田市田島2-6-1
日田市教育委員会

印　刷　877-0086　大分県日田市二串町345-3
日田時報紙器印刷（株）